
【FF11】 自キャラ憑依物（作者の趣味）

育毛強化月間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【FF11】自キャラ憑依物（作者の趣味）

【Nコード】

N2517T

【作者名】

育毛強化月間

【あらすじ】

FF11プレイヤーである俺は、助けを呼ぶ声に適当に返事をして眠ったら自分の家ではないどこかに飛ばされてしまった。自分の持っているアイテムを調べてみて分かったが、ここはFF11の世界らしい。いや、そんなことよりも俺はミスラ（女）になってしまっているようだ。どうしよう……。何故呼ばれたのか、元の世界に帰れるのか？そんな不安を抱えながら俺は世界の謎に挑んでいくことになる。

FF11の自キャラ憑依物が読みたかったのですが、無かったの
自分で書こうと思い立ちました。作者の知識は曖昧なので分からな
いことがあったら調べています。そのため、更新は早く出来ない予
定となっています。TSは作者の趣味です。

1話 稀なる客人

2002年、一つのMMORPGが運営を開始した。

日本を代表するゲーム会社・ス●ウェアソフト（後のス●ウェアエックス、以後SE）が満を持して世に送り出したファイナルファンタジーシリーズ最新作であるファイナルファンタジー11（以後FF11）だ。傑作RPGのナンバリング、コンシューマゲーム機初のMMOと聞いて多くのゲームファンが狂喜した。当時としては美しいグラフィック、そのグラフィックを活かした細かな作りこみ、練りこまれたシナリオと世界設定、その全てが高いレベルで纏められMMORPGとしては脅威の完成度を誇ったゲームに多くの人間が魅了された。そしてFF11は実に10年以上もサービスを続ける化け物（日本のみにおいて）コンテンツとしてSEを支え続けたのであった。

そして月日は流れ、20XX年。他社MMORPGの氾濫や技術面での差が決定的となったことで起きた契約者の減少を重く見たSEは遂にFF11のサービス終了を宣言したのだった。ここに一人のFF11狂がいる。彼の生活は仕事も恋愛もFF11を中心としていた為、これから何を抛り所にしていけば良いのか途方に暮れている最中だ。この物語は彼に降りかかる珍妙不可思議な事件を記録したものである・・・

その日俺はいつもの様に仕事を終えて家に帰り、2秒でFF11にログインして白門———大人数が集まるロビーのような街、正式

名称を「アトルガン白門」という——でシャウトを聞いていた。ここ最近の白門はFF11に関する懐古のシャウトで溢れかえっている。何年も前はあらゆるコンテンツのメンバー募集をこの街でしたものだ。契約者数が減ってからにはメンバーが集まらないことが多くなったため、フレンド登録をしてある数人やリンクシエル仲間で行動することがメインとなっていた。思い出話に花を咲かせるプレイヤー達を見ながら俺は買って来たコンビニ弁当を取り出し、温める。

唐突だが俺はニートではない。自分でも信じられないが、今は市役所に勤めている。これだけは【よくやった!】と自分を褒めてやりたいところだ。何故そんな事を言い出したかといえば、俺のFF11のステータスは普通にプレイしているなら何かを捨てなければたどり着けないんじゃないかと思えるようなものだからだ。全部で8キャラ持っていてメインキャラはからくり士・学者・侍を除いたジョブが最高レベルの90、他キャラも総合すると90にしていないういジョブは無い。合成スキルもそれぞれ最高の100まで上がっており、金稼ぎにしてもコンテンツに参加するにしても十分に廃人と呼べる程度の時間を掛けて育ててきた。このおかげで奇跡的に出来た彼女には一緒にいる時間が極端に少ない為「馬鹿じゃないの」と愛想を尽かされ、仕事では同僚と飯を食いに行った時に当たり障りの無い適当話しか出来ないような付き合いしかない。これだけならまだまだ更正の余地はあるが、問題なのはFF11に必死すぎてそれらを大した事ではないと思えてしまう墮落しきった性格なんだろう。

そんな俺がFF11のサービス終了宣言を聞いて腰を抜かすほど驚いたのは言うまでもない。人数の減少からいつ終わってもおかしくないと自分に言い聞かせては来たが、いざ事実を見るとそのショックは半端なものじゃなかった。「終わったら何を生甲斐に生きて

いけばいいんだよ」なんて普通の人が聞いたら鼻で笑われそうな台詞をつぶやき呆然としていた様はさぞ滑稽だった事だろうと思う。まあ落ち着いた今は終わりに向けてヴァナディール観光（笑）でもしながらのんびりと過ごそうかと思っている。

温めたコンビニ弁当をレンジから取り出し、食いながら白門から移動する。ずっと前に競売で買って放置していたテレポリングHを使い切ってみようかと思った。テレポリングHとは各地のゲートクリスタルに移動できる魔法の一つ”テレポホラ”の効果を得られる装備アイテムだ。使い捨てのアイテムだからと取っておいたのだが、今では何の意味もないし使われたほうが本望だろう。使用したテレポリングの効果が発動し、俺のキャラは”ホラのゲートクリスタル”へ飛んだ。

「久々に使ったな〜テレポリングHなんてw」

と呟きながら台座を降り、チョコボガールに話しかける。彼女たちは各ゲートクリスタルに置かれたチョコボ乗り場の役割を果たすNPCだ。借りたチョコボに乗ってジャグナー森林を目指す。今回はジャグナー森林で穴探しとその周りにある物でも調べてみようと思う。このジャグナー森林という森には岩山が数個あり、エリアジャンプの為のトンネルになっているものやただの洞穴等多数の穴が開いているのだ。プレイヤーの間ではそれなりの名所だが、俺はまだ詳しく見たことが無かった。

「ほおー、ここはトラの巣穴か」「穴人中暗くて何も見えんw」「やべ、ギルド棧橋入っちゃった・・・」

ひとしきり探検を楽しんだ後、俺は北西の湖に来ていた。この湖はキャラクターがすっぽりと水の中に沈むほど歩ける範囲が広い湖―

——他エリアの湖や池は入れてもせいぜいで足元まで位の水かさが多い——で、ヴァナディールの中で一番好きな場所だった。水の中にキャラクターを沈めたまま木に囲まれた湖を見ながらペットボトルのお茶を飲む。

「はあゝやっぱ綺麗だな。一度でいいからヴァナの世界に入ってみてえな。」

とどうしようもない妄想が頭に浮かぶ。お茶を飲み終わるとやることもなくなったので畳にごろんと寝転がる。仕事後ってやることなくなると抗いがたい眠気に襲われるよなと思いつつ目を閉じてまどろみに身を任せた。

——どのくらい経っただろうか。少しばかり（だと思う）寝たのに今日は全く眠気が収まる気がしない。目覚ましかけとかなないと明日起きられないかも知れねけどまあいいか、寝よう。と思った時、誰かの声が聞こえた気がした。

「助……て」

はあ？何だって……？

「……たしのヴァ……ールを救……て」

遂に幻聴まで聞こえ出したか。やべえ、正気に戻らないとこの先生きのこれないな。

「助けて！」

「うるさい、分かったから静かにしてくれ。眠いんだよ・・・」

眠気で何も考えられない状態だった俺はすっかり受け答えが出来て
いるかどうかとも分からなかった。どうせ幻聴だし構わねえだろと意
味の分からない事を考えながら眠りについた。

目を覚ますと俺は何故か水中に放り出され、溺れていた

2話 どこだよこは・・・(前書き)

サブタイトルにクエスト名を付けるつもりはありません。でもFF11の異世界物なら最初の話は稀なる客人でおkですよ。※作者はFF11をPC版発売当初からプレイしてはいますが装備・ステータス等は貧弱一般人そのものです。廃装備のテンプレ知識にもズレがあるかもしれません。

2話 どこだよこいは・・・

「ガハッゴボボッ」

まずい、いきなり水中に放り出されたおかげでパニックって水を飲んでしまった。足が地面につかない為に余計に混乱して暴れてしまい、何も考えられなくなる。落ち着け、落ち着け俺、とりあえず周りを見よう。何とか暴れるのをやめ、咳を我慢し息継ぎをしながら周りを見渡す。すると数メートル先に岸が見えた。

「なんだ、大して危険な場所じゃねえじゃん・・・」

大量に飲んでしまった水の為に催していた吐き気を我慢し泳ぎだすと、すぐに地面に足がついた。ホッとして水から上がり、両手を地面につけてゼイゼイと肩で息をする。しかしここはどこだろうか？見覚えの無い景色に疑問を覚えていると吐き気が遂に限界になり、胃の中の物をぶちまけた。

「あれ、俺少し前に幕の内弁当食ったよな」

胃液と飲み込んだ水だけしか含まれて居なさそうな吐瀉物を見ながら考える。こんな事よりも気にするべきことは大量にあるわけだが、頭が考えることを拒否している。そうしてかがみこんでいると水が俺の体温を奪いながら蒸発していき、終いに俺はガタガタと震え始めた。

「手が・・・震えてきた・・・」

駄目だ、このままでは冗談じゃなく死んでしまう。まだ俺にはFF

に代わるMMOを見つけて適当に自堕落に生きていくという使命があるんだ。まずは服を脱いで乾かさないと。何か他に着られるものは無いかといつの間に身に着けたかわからない、背負ったことも無いようなデザインのバックパックを開く。

「おいおい、何だよこの鎧は？どうやって入ってたんだよ。」

バックパックから白い鎧？のような物が出てきた。かなり良い素材を使っていると思われるその鎧は美しい光沢を放っており、肩の所は痛そうな棘が何本も出ていた。日本で普通に生活をしていく分には似つかわしくないその鎧を俺は何故か見たことがあるような気がした。どんどん冷たくなっていく体に比例するように心も冷たくなっていく。冷静になったという意味では断じてない。寧ろ俺の頭の中はこれ以上に無いくらいの混乱で満ち溢れていた。

「これって、トワイライトメールだよな・・・どう考えても。」

一人でブツブツ呟くのは恥ずかしいが、何か行動していないと精神的な安定を保てそうに無い。鞆に向けて鎧を近づけると鎧は圧縮されて吸い込まれるように消えていった。マジどうなってんの？っていうか寒い、このままでは凍えて死んでしまう！何かないか何か・・・とゴソゴソやっていると青いドレスが手に握られた。

「馬鹿か！こんな物しかねえのかよ、女じゃねえんだぞ俺は！・・・体を拭く位には使えるか。」

更にゴソゴソと探っていると、茶色っぽいタキシード？のような服をつかんだ。ああ、こんな所で着るような物でもないが、取り敢えずこれ着とくか。マシな服入ってないしな・・・これ入れた奴どんなセンスしてるんだよ。頭の中で情報が錯綜しているが、今はまず

着ている服を脱いで体を拭いて着替えなければ。赤くて金属的な裝飾施された鎧を脱いだ所で俺は未曾有の衝撃を受けることになる。

「あれ？何だこの体・・・おかしくね？やっぱ夢だこれ」

胸に形の良い2つの山があるのを見てしまった。呆然としてその山を鷲掴みにする。夢なんだこれ、あー、良かったと心の中で言葉を発してみるが、残念ながらこんなにはつきりとした夢を俺は見たことがないし、そんな事をしてみても夢は覚めなかった。この体は男である俺の体ではないと言う事実に叩きのめされたが、死にそうなほど寒いので仕方なく服を脱いでいく。案の定脚の付け根にあるはずのモノがない。急いでドレスで水分を取り除きタキシードに着替えようとする、追い討ちを掛けるように絶望が俺の心にタックルをかましてくる。

「ああ、尻尾だ！尻尾があるよ！尻尾生えちゃってるよ俺え！えっ耳がねえ！あ、上にあるのかよ・・・はああ・・・」

体中を手で探りながら悲鳴に似た声を上げる。俺は、まさかミスラにでもなっちゃったのか・・・道理で声が高い訳だ。ドレスなんて女物な服が鞆に入ってるのも納得ってか。取り敢えず火でも熾してたき火でもしないと体が温まらないし、着ていた服も乾きそうにない。良く見たらさっきまで着てた服って赤AF3一式じゃねえか。とことん有り得ねえな、いやそんなことはもうどうでもいいか。早めにたき火の準備をせねば。とここで重大な事に気付く。

「ライターなんて持ってる訳ないよな、やっぱり。ど畜生が。」

ここに来てドン詰まりの状況に陥ってしまった。こんな森の中火も熾さないでいれば何に襲われるか分かったもんじゃない。事実俺自

身がミスラのような生物になってしまっている時点でどんな猛獣が徘徊していてもおかしくない。空の色から見ると、現在の時刻は夕方になりかけのようだ。周りはと言うと、俺の目の前には馬鹿でかい湖が広がっており、向こうの岸が見えない状況だ。このまま暗くなれば、水辺に集まってきた小動物を狩りに肉食獣が来てしまう可能性が十分ある。ではどうすればいいのだろうか？自慢じゃないが俺は一度もサバイバルなんて経験したことがない。どっちにいいか良いかなんて皆目検討もつかない状況で身の振り方を決められるような性格をしていたら今頃ネットゲなんてやっていないだろう。タキシード姿でグルグル歩き回りながら考えていると、俺にしては良く気付けたと言えるアイデアが頭の中に閃いた。

「魔法使えば、火を熾せるかも・・・なのか？」

赤のAF3シリーズを着ているなら初期の精霊魔法位は使えるはずだ。俺は試しに魔法を唱える真似を試してみた。

「ファイア！」

何も起こらない……。どうしようどうしよう、姿形だけFF11で他はあれか？見せ掛けか。藁にも縋るような気持ちで連呼する。

「ファイア！ファイア→ファイア←駄目か。ああもう、火が欲しいんだよ！ファイア！・・・ひいっ!？」

火を切実に願いながら叫んだところ、突然目の前に炎が出現した。情けないことに俺はビビッて後ろに下がり、後ろにあった木の根っこに躓いて転んでしまった。

「いててて・・・火は出せたみたいだな。何で最初のは駄目だった

たんだろう。イメージするのが大事なのか？よし、もう一回だ。（ゴゴゴゴ）・・・ファイア！」

勢い良く爆ぜた炎は詠唱（？）の対象であった朽ちかけの木を根こそぎぶっ飛ばした。またも驚いた俺は後ろに転ぶと同時に反射的に顔を守るため腕を交差させてガクブルしていた。しばらくして安全だと分かり腕を下ろし考える。イメージが強力すぎたのか・・・あれでは日常的に使えない。だとすれば程々をイメージしながら詠唱すればいいのかと思い、枯れた木々を集めまくる。そして三度魔法を唱える。

「たき火ができる感じの程々の炎と・・・ファイア！」

体の中で力が抜け出る感覚を味わうとすぐに炎が出現し、枯れ木に火を点けた。何とか成功したことで安堵し、近くの木から折って作った物干しに濡れた衣類を巻きつけ座る。ようやく訪れたつかの間の安らぎに身を任せ、俺は思考の海に潜っていくのだった・・・

2話 どこだよこは・・・（後書き）

小説書くのって大変ですよね。

※補足です

・ミスラ

↓プレイヤーが選べる種族です。猫耳が頭の上についていて、お尻から尻尾が生えています。

・赤

↓赤魔道士の事です。物理攻撃以外は一応オールマイティなジョブだと思います。プレイヤー間では最近若干必要度が少なくなっているというジョブです。

・赤AF3シリーズ

↓FF11のジョブの一つである赤魔道士の専用装備です。それぞれのジョブに用意されている専用装備は現在3種類あり、装備レベルが一番低いものがAFアーティファクトと呼ばれています。その事から、専用装備全体をAF1、AF2、AF3と装備レベルの順で分けることが普通になっています。そして主人公が装備していたものはレベルが高い通称赤AF3シリーズ（正式名称エストクル装束）です。

・トワイライトメール

↓高レベルのプレイヤーが対象のボスモンスターを倒すとドロップする可能性がある鎧。重装備が装備できるジョブを持っているならかなり重宝するであろう鎧ですね。

3話 どんな状況だこれ（前書き）

この物語にはFF11のネタバレが多分に含まれる予定です。ご注意ください。

3話 どんな状況だこれ

パチパチと音を立てて燃えるたき火を見ながら、俺が置かれたこの奇天烈な状況について1つずつ整理してみる。

- 1、FF11の世界に来てしまった？
- 2、俺は女になってしまった。しかも尻尾やら猫耳やらが生えてしまっている。
- 3、魔法が使えるようになってしまった。それも多分かなり高いレベルで扱えてしまうだろう。
- 4、今いるこの場所は一体どこなのか？
- 5、帰る手段はあるんだろうか？

今思いつく問題はこんな所だ。他はもう分からん。本当は何も考えたくないんだけど、ずっとこのままという訳にもいかないし少し整理してみるか・・・。

1については色々な物証が揃いすぎてしまっている。それらは俺が確かにFF11内で手に入れてあったアイテムであり、見覚えもある。オマケにFF11内で覚えていた魔法も使えてしまった。この事から多分この世界はヴァナディールなんだろうと予測できる。

2は・・・これはもしかして8人いた俺のキャラクターの中でもメインで使っていたミスラの「テレサ」ではないだろうか？額にくっ付いていた良く分からないバンドと髪を結っていた紐をほどこいてみる。すると綺麗な金髪が視界に現れた。バンドを付けて髪を結っているフェイスタイプはミスラの中でもF8タイプしかない。テレサももちろんF8だ。そして俺の持ちキャラにミスラは一人しかいないのだからこれも確定なんだろうか。いやでも俺が知っている

ミスラは他の種族と比べて肌がちょっと茶色いが、腕を見てみるとかなり白い。本当にミスラなのか？考えてみても俺の残念な脳では分からないだろうから保留にしておくか。

3、魔法が使えるのは俺が現在赤魔道士だからなのだろうか？赤魔道士とは白・黒魔法それぞれのエキスパートには及ばないが魔法を使い、且つ強化・弱体魔法のエキスパートというジョブだ。しかし90レベルともなれば魔法の質、量共にかなり使い勝手が良くなる。もしこの世界にプレイヤー側キャラクターが沢山いる場合は別に特筆すべきではないんだろが、何故だろうメニュー画面を呼び出せなければチャット画面を使うことも出来ない今、そんな人間がこの世界にいる訳がないという思いがふつふつと湧きあがって来ている。ゲームシステムに関するコマンドなど一切思いつかない——色々試してみたが目の前にコマンドが現れるなんて親切なことはなかった——し、大体がVRMMOでもないFF11をこんなリアルに再現する必要がない事を考えると、ゲームの中ではないような気がする。・・・話が逸れてしまったが、何が言いたいかと言うと迂闊に人に力を見せたら危ないのではないか？だから強い力になるべく隠しておいた方が良くはないかという事だ。俺は今女の姿だし、誰かに目を付けられて集団で襲われれば抵抗しても簡単に捕まってしまうだろう。そうなればお先真っ暗人生が始まる事は目に見えている。被害妄想みたいな思考になっているが、こんな非常識な状態に放り込まれれば非常識な考えにもなるだろう。

4、俺の居る場所は何となく見当が付いている。ログインしてここに来るまでにテレサが佇んでいた場所・・・「ジャグナー森林」ではないだろうか？見た目本物の木、ゲームとは違う目の前に広がる巨大な湖と違う点はあるが、俺が落ちた場所はテレサがすっぽり入る位の水深の場所だったし、木の種類や地形は何となくジャグナー森林をリアルにするとこんなもあって気がする。

5については本当に何も分からない。今の時点では考えるだけで時間の無駄だと思うので保留にしておこう。

「なんだ、結局分からない事だらけじゃねえか。」

思わず口から言葉がこぼれる。自分がどこの誰かもここはどこなのかも正確には分からない。一体俺は何をやっているのか、これから自分の世界に帰る道に無事に辿り着けるのか。腹の奥底から湧いてくる不安と恐怖から身を守るように膝を抱え俯いていると、辺りはすぐに闇に包まれた。闇は俺から更なる恐怖を引き出しにかかってきている。このままでは精神的に保たないと感じたので、自分が持っている物の確認を行うことにした。

「コイツの中に武器は入ってんのかな・・・。」

武器武器くと鼻歌混じりにカバンを漁っていると、長い騎士剣を見つけた。あまりにも白く美しい刀身は、見るもの全てを虜にするオーラを放っている。持ち主の俺も例外ではなく、頭の上にかざしてうっとりと思惚れていた。

「これは、シラムシールか。確か＋2まで鍛えてたっけ。これなら身を守るかな・・・。」

さらに調べていると、ゴツゴツとして角ばった盾らしき物が出てくる。

「玄武盾かあ。この形は実際に見てみるとあれだな、みすばらしくて盾に見えないな。」

素晴らしい性能を誇る盾の勇姿に苦笑する。この形で赤魔道士が装備できる盾の中では最高の能力を持っているというのだから驚きだ。さて、身を守る物はこれでいいだろう。後は、やっぱり服だな。流石にタキシードで森の中を移動するのは動き辛いし、目立つし、防具としても最低だしで全く良い事がない。そこそ役立って、不自然ではない服はないものだろうか・・・。

「おお、ティールがあったか！これなら大分マシだな。」

ティールサイオと呼ばれている後衛系ジョブにとってつぶしが利く装備一式を取り出す。全面的に藍色で染められたローブを俺は気に入っていて、街着として愛用していた。そのセンスはおかしいとフレンドにぶっちゃけられた時は落ち込んだな。

「これだけ揃えればどこかの村か街に着くまでは大丈夫なはず！早速着てみよう。」

全ての装備を装着し終えた俺はそのちぐはぐさ加減に違和感を感じざるを得ない。後衛系の服装なのに剣と盾を装備しているってのは俺の美的センス○が許さない。これから移動するなら、本当の意味での街着も探しておく方が良さそうだ。

何とか精神不安定な状態を緩和しようとフル回転していた脳味噌の計画が大成功を収め、少し気分が上向いてアレコレ思いを巡らせている俺だったが、その直後に後ろに潜んでいた影にどん底に叩き落とされる事を気付くことは出来なかったのだった・・・

3話 どんな状況だこれ（後書き）

※用語解説

・シャムシール

↓FF11において、武器を強化できるクエストがありますが、現時点での片手剣の中の1つのルート最終段階がシャムシール+2という片手剣です。

・玄武盾

↓とあるNMがドロップする盾。作者も愛用している高性能な盾です。

・テイルルサイオ

↓それほど魅力的な装備ではありませんが、後衛にとってはつぶしが利く装備です。一式は頭・胴・手・脚・足の5部位となっています。

4話 少女の決意（前書き）

妄想大爆発です。

4話 少女の決意

「とにかく人の居るところに行ってみよう！」

青いローブを着終えた俺はちょっと気分が良くなり、誰か人に会ったらどんな設定で自己紹介をしようか、この世界の人は俺に優しくしてくれるだろうかとまだ見ぬ異世界人に思いを馳せていた。その時この世界に来て初めて笑みを浮かべたんだと思う。状況を少しでも掴めた事で心に余裕が出来た。それ自体は精神に安定をもたらす必要以上に取り乱さずに居られるという利点があったが、同時に心に隙ができて普通なら気付けるような事を見逃してしまう可能性がある欠点を残念ながら俺は正しく認識できていなかった。そしてそれを身を以って知ることになってしまう。

楽しい想像に耽っていると、背後からパキッと木の枝が折れる音がした。慌てて振り返ると、そこには実際には見たことはないが見覚えのある謎の生物が3匹、いや3人立っていた。戦慄し、言葉を失い、全く動けなくなる。その3人の生物はそれぞれ違う装備に身を包んでいる。一人は皮の生地金具を取り付けたようなマスクを被った前衛、一人は醜悪な顔をむき出しにした軽装備のアタッカー（なのだろうか？）、一人はよく分からない布を被った後衛。

体と思考能力は全く働かないが、俺はそいつらが「オーク」と呼ばれているという事は瞬時に分かってしまった。しかし、実際に見てみると威圧感がまるで違う。俺の身長はそんなに高くないことはちよっと動き回ってみてよく分かったが、それにしても前にいる3人が3人とも俺の2倍近く身長があるというのはどういう事だろうか。更に、大きいのは身長だけではない。オーク族の体つきは言ってしまうえば皆力士みたいなものだ。横幅も凄まじいものがあり、そして

腕の筋肉を見る限りその横幅は脂肪によるものではないとすぐに推測できる。

俺が一体何をしたというのだろうか？何も悪いことはしていない。今まで他人に迷惑を掛けてきたことはあるにはあるが、他人の人生を壊すようなことはした事がない。それなのに何だって神様はこの最悪な状況に俺を放り込んだというのか。俺に死ねと言っているのかと呪いを込めた思いをいるかも分からない神様に向ける。

恐怖と動揺が露骨に表れていたであろう俺の顔を見たアタッカーのオークはニヤリと笑ったかと思うと

「○×#※\$ЖЯⅢ・・・×ΘΩ?・・・グフフ」

とか俺には理解できない言語を喋り、そして最後に気持ち悪く笑った。今すぐに逃げなくてはならないと頭は最大限に警鐘を鳴らし続けているが、怯えというフィルターに遮られてその音は体に届かない。動けないでいると、アタッカーオークが俺に近づいてきて強引に手を掴まれ上へと引き上げられた。万歳をしているような格好で持ち上げられ、オークと目が合う。ジックリと嘗めるように眺められ、恐怖に耐えかねた俺は情けないことに失禁してしまった。その様子にオークは楽しくて仕方がないという表情をしたかと思うと、俺を下ろした。何をされるのかと思い、ビクビクしていると顔に衝撃を受けて後ろにあった木の幹まで吹き飛ばされた。

どの位の時が経ったか分からない。あの後俺はオーク達から袋叩きにあっていた。このオークたちと来たら現実世界にいるヤクザなんか目じゃないくらい怖い。そんな奴らに暴行を受けていれば自然と泣きたくなってくるのは当然だと思う。そう、俺は今殴られ、蹴られながらヒックヒックと泣いてしまっている。それを見ているオークは嬉々とした表情を浮かべているのだ。一体どんな変態どもなんだこいつらは。おかしいんじゃないか？

いや、今一番おかしいのは俺自身だ。殴られ、髪を引っ張られ、泣きながらこんなことを考えられる。何故なんだ？そうか、「痛くない」んだ。こいつらも女をいたぶるのに全力を出しているとは思えないが、それにしても痛みが欠片も走らないのは明らかにおかしい。もしかしてこれはステータスの差なのだろうか。俺のレベルは以前と同じなら90だったはずだ。そしてサポートジョブはデジョン用に黒魔道士にしていた。それが俺のステータスだというのならば、ジャグナー森林に居るようなオーク等即ひねりつぶせるだろう。そういうことなのか？

怯える表情をやめた俺に興醒めしたのか、アタッカーオークは後衛に何かを指図した。すると後衛オークは森の奥に消えていき、しばらくすると鞍が付けられた巨大なトカゲを連れてきた。鞍には鎖につながれた足かせのような物が付いており、更にオークの手にはジャラジャラと拘束具のような物が握られている。【むむむ。】あれは捕虜を拘束する手かせと捕虜を輸送するためのトカゲか……。あんなに嚴重に拘束されたら確実にオークの拠点に運ばれるまで動けなくなってしまう。

どうする、どうすればいい？俺……。このままでは拠点に連れられて行かれてしまう。そんな事になるならこいつらを殺してしまわなけ

れば。覚悟を決める、俺。異世界だし殺されそうにもなってるし、正当防衛が認められるはず。もし認められなかったとしても関係ない。生きたければ戦わなければ。やれ、俺！負けるな！

決心して魔力を貯め、キッと顔を上げた俺にオークは不機嫌そうな表情を向ける。思い知らせようと殴ろうとするオークの言葉より先に俺の言葉が響く。

「仕方ないからやってやるよ！喰らえ、エアログア！！」

あたり一面に風が吹き荒れ、轟音が轟く。オーバーキルを体言するようなその風はオークとトカゲの体を切り裂いた後、周囲20メートル程を細切れにして消滅した。尻餅をついて座り込み、恐怖から開放された安堵感から嬉し涙を流していると、切り刻まれたオークの体から赤い光が浮き上がってくるのが見えた。その光は薄くなり、かわりに透き通った結晶がコツンと落っこちた。拾い上げて眺めてみる。

「これが・・・クリスタルか。とてつもなく綺麗だな。」

4つほどクリスタルを手に入れ、空を見上げた。もう空が明るくなりかけている。俺がどう考えていたとしても、この世界は俺をこの世界の者として扱うだろう。身体能力は凄まじいとしても、この世界に適応しなければ生きていけない。ならば少しずつ慣れていくしかないだろう。最低でも自分に危険が及ぶ状況を察知する事位出来るようにしないと。

妙に晴れやかな気分になった俺は、この世界で生き残るために全力を出そうと決意するのだった。

4話 少女の決意（後書き）

※用語解説

・サポートジョブ

↓ジョブにはメインとサブがあり、サブにつけたジョブはメインにつけたジョブのレベルの半分の力を発揮できます。このメインとサブは自由に変更可能です。

例）黒魔道士メイン80で赤魔道士サブ50だとすると40レベルまでの赤魔道士の能力が使える80の黒魔道士が出来上がるというわけです。

・エアログ

↓黒魔道士のみが使える範囲精霊魔法です。サポートジョブに黒魔道士をつけて必要レベルに足りていれば他のジョブでも使う事ができます。

・クリスタル

↓ある状態で敵を倒すともらえる水晶のようなものです。様々な用途に使える便利な宝石？です。この物語の主軸となる予定です。

5話 森の中での出会い（前書き）

ガールズラブのタグを付けはしましたが、そうなるかどうかは自分もちよつと分かりません。

登場人物の名前はかなり適当です。

※ガルカの人をヒュームだと思って適当な名前を着けてしまったので修正しました。

5話 森の中での出会い

濡れてしまったスロップスを洗い、履けるようになるまで乾かすと、すでに太陽が真上まで来る時間帯になっていた。決意を新たにした俺はカバンを背負ってキャンプを後にした。まずはどこでも良いから道を見つけることから始めよう。道なりに歩いていけばどこかの街なり村なりに辿り着くだろうからな。しばらく歩いていると、遠くに何か得体の知れない虫のような物が見えた。

「ああ、そういえば居たっけな、カブト虫が。別に強くないんだけど・・・う、駄目だ無理。」

カブト虫と呼ばれているのにクワガタのようなハサミを持ったその虫は1メートル近い巨体を持っていた。素晴らしくグロテスクなその姿を現代人である俺が許容出来るはずもなく、大回りして避ける。一度酷い目に遭ったというのに俺の認識の甘さはまだ抜け切れていないようだ。視界に虫をターゲットしながら移動していれば、当然周りに意識が向くことはない。そうやって歩いていると、俺の体は何か大きなものに当たって止まった。

「グルルルル・・・」

「えっ？」

突然の唸り声に面食らってそちらを見ると、大きな黒いトラが白い歯を剥き出しにしてファイティングポーズを取っていた。咄嗟に剣に手を掛けようとする、トラが前足を大きく振りかぶってから俺を横に薙ぎ払おうとしてくる。何故かスローモーションを見ている気分になった俺はトラの攻撃をしゃがんでかわす。トラは続けざま

に喉に噛み付こうとしてきたので、身に付けていた盾を叩き付けた。声にならない悲鳴を上げたトラは一度後ろに引き、様子を伺っている。俺が一步踏み出すと、トラは下がり警戒する。そんな事を延々やっている、だんだん嫌になってきたので何か方法はないかと考えていた所、魔法で決着をつけてしまえば良いとの考えに思い至った。現実世界に無い方法を用いて戦う事に慣れるにはもう少し時間が必要だろうだ。

とは言え、精霊魔法ばかりで戦っていて、剣もろくに扱えないのは嫌だなあ。シャムシールを普通に振れる位にはなりたいたいし、魔法と剣を両方使って攻撃してみるか。そう決めて魔力を練る。すぐに魔力は練り終わり、魔法の名前を唱えた。

「バインド」

黒魔法が発動し、トラはその場に縛り付けられ動けなくなった。急いでトラのすぐ横まで飛び込み、俺はトラの首めがけてシャムシールを振り下ろした。トラの首が地面にどさりと転がり落ちる。スパッという音がしそうなほど滑らかに首を断つことが出来てしまったため、驚き、目を見張る。生身の動物の太い首を一太刀で綺麗に切り落とすなんて、相当難しい芸当のはずだ。それを軽々とやってのけるということは、片手剣スキルも俺の経験として適用されているということだろう。つくづく凄い体してるな、このお嬢ちゃんはお嬢ちゃんであるかは姿を見ていないので分からないが）。と、自分の身体能力に呆れていると、トラの体から紫色の光が溢れ出てきて薄く光った後、クリスタルに変化した。

「雷のクリスタル、ゲット。トラの体からも戦利品取ったほうが良いのかな？どれどれ・・・うえ」

自分が切り落とした首の断面が一番先に目に入ってしまった。耐性がない俺には相当にきつい。何とか頑張ってトラの首を持ち上げようとするが、吐き気がこみ上げてきたので断念した。オークの時はハイになっていたから何とも思わなかったのかな。感情つてのは厄介だな全く。猟師の真似事はもうちょっと慣れてからにしておこうか。

その場を後にした俺はしっかりとカブト虫を避け、歩き出した。そうして歩き続けること1時間程——時計が無いから性格には分からない。不便だ。——歩いたところで念願の道のような場所に出ることが出来た。嬉しさから自然にガッツポーズが出る。

「やった！やっとな道に出られた！」

しばらくその喜びを噛み締めるように目を瞑っていると、腹が限界のサインを示す音を鳴らしてきた。そうだった、俺まだここに来てから何も食ってないんだった。さっきまで気を張ってたから気にならなかったけど、この空腹はなかなか強烈だ。さっきのトラでも食っておけば良かったな、味の保障は全く出来ないが。

肩を落とし、これからの食料をどうしようか考えていると、どこからか剣戟音と悲鳴が聞こえてきた。

「オークの悲鳴じゃないよな。女の人悲鳴に聞こえたけど・・・」

音がする方向に向けて走り始める。ただ向かうだけでは何かに巻き込まれそうだと感じたので、木と木の間をすり抜けるようにする。これで最低限には身を隠すことが出来るだろう。音が響いていると思われる場所に着くと、オーク2対人間3の乱戦に遭遇した。俺は

木の陰からそつと様子を伺ってみた。

オーク側は盾と剣を持った騎士のような前衛、弓を持ったアタッカーという構成。人間側は男2人に女1人で、男はお揃いのハーネスを着けている。1人が両手斧を持ったヒューム、1人が格闘武器を持ったガルカだ。女は茶色いローブを装備したヒュームで、後ろから強化や回復を掛けているようだ。騎士オークと戦っていた両手斧持ちの男が声を張り上げる。

「何でこんなところにサージェントが・・・！」

そういえばそんな奴もいたなと思いながら眺めていると、モンクっぽい人の攻撃をかわしたオークが弓を使い、後衛の女の人の腕を射抜いた。うめき声を聞いた戦士っぽい人が振り向き

「エレナ、大丈夫か！」

「バリー、前から来ているわ！・・・ああっ」

と声を掛ける。終始押していたオークがそれを見逃すはずもなく、盾を使って思い切り戦士っぽい人の頭を弾いた。のされた彼を見て、後衛の女の人は小さく悲鳴を上げた。それを見て焦ったモンクっぽい人も劣勢に立たされているようだ。人数多いし大丈夫だよな、寧ろ加勢したら手柄とか何かでいざこざが起こったりしないかな等と思ひ、静観していたがそんな暇もなくなった。女の人に切りかかるうとしたオークに即時発動の魔法を掛ける。

「相手はこちらです！スタン！」

オークの体がビクリと震え、一切の自由が数秒間奪われる。俺は木

の陰から全力で駆け、女の人の前に躍り出た。動けるようになったオークは俺が剣を振りかざしていることを見て取ると、頭の上で盾を構えた。俺はその上から剣を振り抜く、するとオークは盾ごと一刀両断された。

今度はオーク側から悲鳴が上がった。優勢からいきなり現れた人間に状況を覆されたので大いに慌てたはずだ。後ずさり、逃げようとした所で俺は追いかけるように魔法を放つ。

「グラビデ」

オークの体に巻きつくように黒いエフェクトが発生する。オークの動きは鈍り、もはや早歩きと変わらない速度でしか動くことが出来ないようだった。そんな背を見せるオークの後ろから剣を突き刺すと、そいつは簡単に崩れ落ちた。いつものようにクリスタルを回収して、パーティの所へ歩いていく。

戦士っぽい人も目を覚ましたようだ。挨拶をするためにその人達の前に立ち、声を掛ける。自然な感じで笑みを浮かべられているだろうか、言葉遣いは俺が市役所員だった時の物で大丈夫だろうか。一瞬不安が走る。

「ご無事でしょうか？」

3人の顔を見ながらそう声を掛けたが、3人は呆けるばかりで声も出さない。おかしいな。あ、そうか。自己紹介をしてなかったな。

「い、ごめんなさい。私の名前はテレサと申します。」

帽子を取り、慌てて自己紹介をすると、3人はハッと我に返った。

「ああ、済まない。助かった。俺はバリーという。」戦

「俺はシェルトリンググースだ。グースとでも呼んでくれ。」モ

「助かったわ、ありがとう。もう少しでやられる所だったわ。私はエレナっていうの。」後

こうして俺はこの世界に来てから初めて他の人間に出会ったのだった。

5話 森の中での出会い（後書き）

※用語解説

・ヒューム

↓人間とほぼ同じ種族と考えてもらって構いません。

・ガルカ

↓大きな体躯を持つ屈強な種族で、稀にオークと間違えられることがあるとか無いとか。

・サージェント

↓表記は Orcish Sergeant です。ジャグナー森林には普通いないクラスのモンスターです。

・スタン

↓敵の動きを一瞬から数秒間止める黒魔法です。発動までの時間がかなり短いため、敵の攻撃を止めるのに頻繁に使われる便利魔法です。

・グラビデ

↓敵の移動速度を遅くする黒魔法です。これをかけて動き回りながら魔法や遠隔攻撃で削れば敵を倒せてしまうというすぐれものです。ただしNM（ノートリアスモンスター…名前が付いている特別な存在）にはこの魔法に耐性があるものも多くいます。

6話 200年後（前書き）

村・街の名前は歴代のFFからもじったりしようかなと思ってます。
正直言い案が思いつきません。

ガルカの名前はFF11のガルカ用名前ランダム生成からです。

6話 200年後

「少し痛いと思いますが我慢してくださいね。」

「ええ、大丈夫。・・・痛う。」

エレナの腕に刺さっていた矢を抜き、ケアルIIを唱えて回復する。すると傷はすぐに塞がっていき、傷跡さえも見えなくなってしまう。うはあ、便利な魔法だ。現代の医師が青くなりそうだわ。っと感心してないで次々。バリーとグースにもケアルIIをかける。

「助かった、ありがとうな。」

「悪い。」

「お気になさらず。それより皆さんは最寄の街や村がどこにあるかご存じですか？この森の事はどうも詳しくなくて・・・。」

そう尋ねると、3人は一様にキョトンとした顔になる。え、何かまづいことでも言ったかな・・・？

「テレサはこの森林のど真ん中まで村も経由せずに来たのか？どっちに向かうにしてもこの森を抜けるまで村や街は3つはあるが・・・。」

バリーの言葉を聞いてやっちゃったなと思わざるをえない。ジャグナー森林ってそんなに大きかったのか？ううむ、何て言い訳しようか。森の外れで暮らしてたとか？駄目だ、今さっきこの森には詳しくないと言っちゃまった。記憶喪失とか？いや駄目だ、これからの

身の振り方が極端に難しくなる。異世界人なんで分かりませーんと正直に打ち明けてしまうか？論外。きちがい扱いされるのが落ちだ。ここはもう、適当に話を作ってしまうおうか。

「の、乗っていたチョコボが暴走してしまつて、三日三晩走り続けた後振り落とされてしまったんです。どこだか分からない場所で彷徨って、道を見つけようとしていたらあなたたちに出会ったんです。」

明らかに怪しい話を聞いてあごに手を当てるバリー。しかしそれは一瞬で、彼はニツコリと笑って

「まあいいや、命の恩人の話を聞かないなんて失礼だもんな。そうだろ？グース、エレナ。」

と言ってくれた。良い人だ、バリーさん。他のメンバーにもこれ以上質問することは無いと言外に示してくれているんだ。さすがPTリーダーっぽい事だけはあるなあ。しかし、エレナとグースはバリーを小突いた。

「何命の恩人に尋問みたいな真似してくれてんのよ、このタコ！」

「失礼にも程があるだろ、馬鹿かお前は。っていうかお前話を引き伸ばしたいから聞いてただけだろ。このエロガツパが！」

「何だお前ら、俺は誇りあるパーティーのリーダーとしてだな・・・」

ギョルルルルルル・・・

3人はその音に対して「!？」という顔をしていたが、青い顔をしている俺を見ると得心がいったような顔でニヤリと笑った。

「ごちそうさせてくれるよな？」

「【はい、お願いします。】・・・」

バリーの言葉に俺はそう答えるしかなかった。

「いやあ、しかし強いよなあ、テレサは。」

火を囲み、食事をしながらバリーが話しかけてくる。目の前には鶏肉のようなものと野菜のようなものを入れて煮込んだスープと、硬いパンが皿に乗っている。確かアイアンパンという名前のそのパンは、日本で一般的に食べるフランスパンの何倍も固く、歯が折れるかと思った。そうやってガジガジ表面を削り取っている俺に呆れたグースは、スープにつけてふやかしてから食べるのが普通なのだと教えてくれた。つくづく何も知らないんだな、俺は。こんなことでこの世界でやっていけるのかと不安になってくるぜ。

「ああ、何せサージェントを一瞬で一刀両断する位だからな。首都の騎士達より強いかな。」

「あんな剣技もあるのに魔法まで使えるって反則だな。どっかの偉い人なのか？」

「いえ、どこかに所属しているということは無いですし、剣も我流です。」

「どこにも所属してないって言うと、冒険者？」

「そうですね、冒険者が一番近い答えかもしれません。」

「へえ、冒険者かあ、初めて会ったな。珍しいことだ。」

「え、バリーさんたちって冒険者じゃないんですか？それに珍しくて、冒険者ってそんなに多くないんですか？」

「いや、俺達はこんななりしてしてるが冒険者ってわけじゃねえんだ。だが、冒険者って情報通だって聞いたけど違うのか？結構有名な話だが。何せタブナジア王国が冒険者だった者を優遇して戦力を集めているからな。冒険者はかつての3分の1位にまで数が減ったといわれているぞ。」

色々な情報をくれるグース。ん？ていうか今聞き捨てならない言葉を聞いたぞ・・・

「タブナジア王国ですか・・・？候国じゃなくて？というかタブナジアって滅亡しませんでしたっけ？」

グースは何を言ってるのか分からないという表情をしていたが、まあいいかといって質問に答えてくれる。底なしに良い人達だなあ。

「候国と呼ばれてたのは180年前位までだったと思うが・・・。
滅亡したのに至っちゃ200年以上前だったんじゃないか？」

「そ、そうでしたっけ・・・？アハハハハ」

思わず苦笑いで誤魔化す。あれ、俺は自分がゲームの中のヴァナデイルそのものに投げ出されたものだと思っただけどうやら違うらしい。それってまずくないか・・・？俺はあの世界の200年後の事なんて全く知らないぞ。本当にどうすればいいんだ。と考えていると、横から何かプレッシャーが・・・。

「ああーん、もう我慢できないいいー！」

「ひいっ」

意味の分からない叫び声を上げてエレナが俺に抱きついてきた。かなりビックリした。そしてぐりぐり俺の顔に頬ずりし、耳や尻尾を強引に撫でる。あ、当たってるよ、何がとは申しませんが。

「この肌の色！ミスラって皆褐色だと思っただけ何この真っ白さ！信じられない！そしてこの可愛い顔！どうやったらこんな美少女が出来るの！？耳と尻尾がこれ以上ないくらいにマッチしているわ！」

「ちよっ、エレナはっちゃけすぎだろ。どこでそんなキャラになったんだ。」

「何よ、あげないわよこの娘は！」

「「ぶっ」」

「エレナさん!？」

エレナの言葉に男二人はスーヴを噴出し、俺は声を上げること驚きを表した。エレナは俺をどこかの酔っ払いの親父のように撫でまわしながら続ける。

「難しい話は私たちの村に帰ってからゆっくりすればいいんじゃないかしら? 時間はまだたっぷりあることだし。恩人へのお礼がこれで済んだわけじゃないしね。」

「だな。チヨコボに振り回されて三日三晩振り回されたんじゃ大変だっただろ? テレサには今休息が必要だろう。村には空いてる小屋も何件かあるから丁度良い。」

どうやらタブナジア云々を聞いた時の俺の顔は、ただでさえ白い顔が血の気が引いたと分かるほど酷いものだったらしい。エレナはそれを見かねて助けに入ってくれたようだ。そうだな、村に寄らせてもらってゆっくりと考えるとしようか。それからでも遅くないだろう。

最初に会えた人達がこの人達で本当に良かった。

6話 200年後（後書き）

※用語解説

・ケアルII

↓FF11では、高位の魔法になるにつれて後ろの数字が大きくなっていきます。従来のFFのようにケアル>ケアルラ>ケアルガではなく ケアル>ケアルII>ケアルIII という表記になります。もちろんケアルガも存在します。

・冒険者

↓現在のゲームでは、冒険者が溢れていて、冒険者一人一人が主人公ということになっています（冒険者のNPCも存在しています）。数もかなり多いです。

・タブナジア

↓このお話の220年前の戦争で消滅してしまった国のことです。原作ゲーム中では、影も形も存在していません。

7話 村へ到着（前書き）

慣れてきたらもうちょっと展開を早くしたいのですが、今の状態では少しずつ進むしかなさそうです。仕様ということで【許してください。】

感想がユーザーのみになっていたので制限なしに変更しました。ご意見や指摘をお待ちしています。

7話 村へ到着

「最近モンスター動きが結構活発になってきててさ、俺達は村と村の間を行き来して危なそうなモンスターを始末してるんだ。まあ、それでもそんなに危険じゃないんだ。村を出られる位の力を着けるまでの練習って所さ。そしたら昨日何故だか知らないけど兵長クラスのサージェントに出くわしちゃって。テレサが来てくれなかったら村を出ることも出来ないまま人生を終える所だったな。」

バリー達って村を出るつもりなんだ。冒険者じゃないって言うけど、冒険者になるのが目的なのかな？

「その練習が終わって経験を積めたら、バリーさん達は冒険者になるんですか？」

「いや、俺達はサンドリアで騎士になるために修行してるんだよ。この辺の奴らは皆騎士に憧れてるんだ。だから倍率がとんでもなく高くて狭き門なんだよ。」

「エリートなんですね。」

今俺達は、彼らの生まれ故郷の村であるアルディ村とかいう所に向かっているそうさ。ジャグナー森林はかなりの確率で雨や雷になるそうだが、ここ数日は気持ちが良い晴れの日が続いているとの事だ。ラッキーだったな。飛ばされた日に雨とかだったら俺はもう死んでただろう。そんな事を思っていると、グースが割って入る。

「待て待て、俺達皆が騎士になりたい訳じゃねえ。それはバリーの奴だけだ。俺は鍛冶職人になりたい。村で鍛冶ごっこやってても腕

は上がらねえからな。とくれば、サンドリアの鍛冶ギルドに殴りこみに行くしかねえ！」

それにエレナも続く

「私は魔法用品店で働きたいわ。ご覧の通りの白魔道士だから、回復魔法に関する知識が必要な。村には置いてない魔法書が沢山あるはずだから今から楽しみでしょうがないわ。まあ、就職出来たらの話だけどね。」

「皆さん別々の夢があったんですね。バリーさんの話では皆騎士志望かと思ってました。」

「ああ、あいつは一見紳士的に見えて、自己主張が激しいからな。」
「その通りね。」

お前ら酷すぎる、と落ち込むバリーを見て笑う俺達。ああ、そういうばこいう心からの触れ合いは現実世界でも久しくしてなかったな。うーん、俺も俺で同僚と一定の距離とってたもんな。

「それで、テレサは今までどんな風に過ごしてきたんだ？」

お返しのように聞いてくるバリー。確か冒険者は皆他の大陸から来た異邦人とか言う設定があったよな。ウルブカとでも言うておくか。

「私は実はこの大陸の者ではないんです。ウルブカという西の方の大陸から来ました。」

「へえ、だからこの辺の事は分からないのか。何だってこの大陸まで？」

「冒険者ですから。好奇心の赴くままにどこへでも行きます。南の大陸でも東のアトルガンでも。格好良い感じ言ってますが、要は根無し草って事ですネ。」

我ながら上手く話せたと思う。アトルガンという言葉に興味を示したようで、グースが聞いてくる。

「アトルガンか。今はあっちも自分の国で手一杯だって言うんで、ここ何十年かは交流がないようだが、俺はあっちの細かい装飾が施された鎧が大好きなんだ。一度サンドリアの鍛冶ギルドに行った時に展示品を見たことがあってな。最初に見た時はアホ面晒して見入っちゃってたぜ。あれが俺の鍛冶ギルド志望の始まりだった訳なんだ。でな、その装束は漆黒と金が見事に調和して・・・」

「まーた始まった。」

喋り続けるグースを呆れ顔で見るバリーとエレナ。

「あの子、基本良い子なんだけど、鍛冶のこととなると見境なく話を始めちゃうのよね。それが彼の良さでもあるんだけど時と場所を選ばないから困ったものだわ。」

賑やかで楽しい時間を過ごしていると、すぐに村に着いてしまった。番人達の早めの帰還と見慣れない来客に興味を持ったのか、ほとんど人が集まってくる。一瞬にして即席の見世物小屋が出来上がった。

てしまった。好奇の目に晒され、小心者の俺は凄まじい勢いで萎縮した。

「おう、お前達。随分と早い帰りじゃねえか。」

「このお嬢ちゃんはどちらさまだい。えらいべっぴんさんじゃないか！」

「マジか、どれどれ。ウホ、これはこれは・・・。」

「押すな馬鹿！」

その光景を見かねたエレナが一喝する。

「アンタ達、いい加減にしないで！この娘はテレサちゃんと言って、私達の命の恩人なのよ。これから村長の家に行かなくちゃいけないんだから。さあ、散った散った！・・・さあ、早く行きましょう。」

ちえっ、詰まんないやら鬼エレナやら様々な事を言いながら観客は散っていった。素晴らしい姉貴ぶりに惚れちまいそうです。

村の様子は、質素な家が寄り集まって出来たといった感じだった。道の脇に100メートルほどに渡って家が建っており、時代劇に出てくるセットを思い出す。村長の家は道の真ん中辺りに位置し、他の家より少し外れた所にあった。一行が家に付くと同時に筋骨モリモリマツチョマンが出てきた。サンドリア近辺にもガルカって結構いるのかな・・・って尻尾がない。ガルカじゃない！？

「親父、俺達の命の恩人を連れて来たぞ。」

バリーの親父さんかよ。ボディービルダー並みの筋肉してるよ。勝てる気がしないよ。

「おい、村の皆の前で親父と呼ぶなど言ってるだろう馬鹿息子が。・ ・ ・で、命の恩人とはどういう事だ。まさかその辺のザ子供に不覚をとった訳ではあるまいな？」

「いや、何故か分からないけど通り道にサージェントがいてさ、危うく殺されかけた所で助けられたんだ。そんなことより彼女を紹介しないと。一応冒険者のテレサだ。」

サージェント、と聞いて一瞬何かを考えていた村長は俺を紹介されると笑顔で握手を求めてきた。

「サージェントだと・ ・ ・そうか、まあいい。テレサさん、愚息がとんだ迷惑をかけてしまったようだ、許して欲しい。私はこの村の村長をやっているドンという。申し訳ないが生憎この村には宿屋がないから、使ってない小屋に泊まってもらうことになると思う。何もない村だが、命の恩人へのご馳走と暖かいベッド位は用意してやるだろう。飯時になったらまた家に来てくれるかな？」

「ありがとうございます。寝床をお借りできるだけで充分です。」

ご馳走とベッドと聞いた瞬間に狂喜しそうになる。特にベッド！ここに来てから柔らかい寝床がなかったから寝ても疲れが全然取れなかったんだよな。今は午後2、3時位だと思うから、晩飯の時間になるまでちよつと寝かせてもらうか。

「すみません。早速で悪いのですが、晩御飯まで少し睡眠を取らせて頂いてもよろしいですか？」

「大分お疲れのようだな。遠慮せずゆっくり休むと良い。おい、バリー。テレサさんを小屋まで案内してやんな。悪さするんじゃないぞ！」

「ああ、任せてくれ、ってしねえよ悪さなんか！じゃあテレサ、行こうか。」

乗りがいいなく。村長さんもさりげなくボケてくるなんて体と顔に似合っていないね。案内された先はプレハブ2個分位の大きさの小屋だった。小屋って言うには大きいな。中も掃除が行き届いているのかゴミも落ちていないし埃もかぶっていない。来客用に常に用意してあるらしい、あの村長さんやるな。

「俺は早々に退散するよ。何か必要な物があつたら言ってくれ。来なかったら起こしに行くから、晩飯のまでには起きようとか考えずにゆっくり眠ってくれ。」

「何から何までありがとうございます、バリーさん。」

バリーは気にするなと笑って出て行った。俺は部屋の隅においてあるベッドに腰掛ける。敷布団が重ねてあるのかかなりフカフカで気持ちいい。そうやって布団の感触を確かめ、心地付いた所で急激に眠気が襲ってきた。絶えられなくなった俺は、現実世界でやっていたように上着を脱ぎ捨て布団に入ると3分も経たずに泥のような眠りについた。

結論…布団ない生活とかやってらんない。

7話 村へ到着（後書き）

※用語解説

・サンドリア

↓プレイヤーが開始できる3国の内の1つです。色々揃ってます。

・鍛冶ギルド

↓FF11内でのギルドと呼ばれるものは、職工組合みたいなもので所謂冒険者ギルドではありません。プレイヤーの職工生活をバックアップしてくれる所ですね。

・白魔道士

↓言わずと知れたFFのジョブ。11にも存在してます。

・魔法用品店

↓サンドリアにある魔法のスクロール（巻物）を扱っている店です。実際のゲーム中では初心者以外寄ることはほぼないでしょう。

・ウルブカ

↓実際のゲーム中でも未実装の大陸です。アイテムや設定資料の中にはそこそこ出てくる可能性があります。

・ザ子供

↓雑魚共の事です。

8話 クリスタル（前書き）

大まかなストーリーは決めてあるんですが、イベントの繋ぎ方・文章の構成の仕方に悩んでなかなか進みません。真似事でこんな疲れるんだから小説家って大変ですね。

8話 クリスタル

体を揺さぶられ、俺は眠りから目覚めた。目を開けるとエレナが視界に入る。

「テレサ、ご飯が出来てるわよ。あらら、これじゃバリーが泣きついてくる訳も分かるわね。」

「エレナさん、わざわざ起こしに来させてしまつて申し訳ありません。自分、そんなに寝てしまつていたでしょうか？」

「それはもう、幸せそうな顔して眠つてたわよ。起こすのをためらつてしまうほどね。それはそうと、今あなた凄い格好だから早く直したほうが良いと思うわ。私も我慢できなくなっちゃいそうなもの。」

「ん、何がだろう？ああ、そうか下着だったなと思いながら下を見るとブラジャーが上にずれて胸全体が露になってしまつていた。しかし、あれだな。男から女になったおかげで上半身については見せてはいけない物だという意識が薄い。人のだから見たいのであつて自分の物を見ても何ともない、と思つてしまふのは何かがおかしくなつてゐるんだろうか。特に感慨もなくブラジャーを直し、話を続ける。というかエレナの最後の言葉に不穏な響きの言葉が含まれていたが敢えて無視することにしよう。」

「あ、これは失礼しました。もう空も真つ暗です、早く行かないと。・・・あのう、エレナさん。私、普段着を持ち歩いていなくて食事に招待されるような服が無いのですがお借りできませんか？」

身だしなみを整えながら、服が無いことに気付いて頼んでみた。

「そんなことならお安い御用よ。家まで案内するわ。」

お札を言い、エレナの家まで付いて行く。晩飯時——寝てしまっていたから本当の時刻は分からないが——だと言うのに灯りが点いていない家が多い。もしかして今は11時頃なのだろうか？そうだとしたら悪い事したな。しばらく歩くとエレナがある家の前で止まる。

「ここがあたしの家なの。」

「でん・・・灯りが点いていないようですが、ご家族は眠っちゃってるんですか？だとしたらこのロブのままで大丈夫です。」

「ああ、いいのよそんな事気にしなくても。それに皆寝てないしね。さあ、早く服を選んじやいましょう。」

「はい、ありがとうございます。」

どっかに出かけているのか？何も聞くなというオーラが出ているのでこれ以上は聞けないな。エレナの家は2階建てで、部屋は2階にあるらしい。女性らしい綺麗な部屋で、整然としている。脱ぎ散らかすのが得意な俺では絶対到達不可能な部屋だな。

エレナはクローゼットに近付いて中を漁り始める。気に入らないのか、いくつかの服を放り投げ始めた。いやいや、今放り投げたの、なかなかシンプルで晩飯を食う位なら丁度良いと思えるが・・・。

「あ、今ので良かったんじゃない・・・？」

「駄目よ、あんな地味なの。もっと派手に行かないと。」

「は、派手に……。夕食食べるだけですよね？」

「そうだわ、これにしましょう！」

聞いてねえよこの人……。凄まじく派手な白いドレスを選んだんだけどこのチョイスは流石に無いな。

「これ、夕食の時に着る服じゃないですよね……。？」

「完璧ね……。村中の、いえ世界中の男が虜になるわ。」

完全に壊れているエレナに恐ろしくなったため、抵抗することが出来なかった。村長の家に行くのにこんな格好をしてどうしろと言うのか。女の体とはいえ、あまりの恥ずかしさに顔から火が出そうだ。エレナは俺の手を強引に掴み、引っ張っていく。そして着いた先は何故か村長の家ではなく、村の集会所のような場所。なにやら話声のようなものが聞こえてくる。ああ、そうか。やられたなこれは。

「エレナさん。嫌な予感がするんですが。」

「良く分かったわね！さあ、真打登場と行きましょう。」

言うが早いか、ドアを開け放つエレナ。押されて中に入ってしまう俺。水を打ったように静まり返る集会所。見渡してみれば、30人は下らないであろう村人が集結していた。ただの客なのに何でこんなに集まっているのか分からない、そして皆の視線が痛い。

「あ、ど、どうも・・・。」

「可愛いにも程があるだろ！こんな娘がサージェントを！？」

誰が言ったか知らないが、その言葉を切欠に俺は大騒ぎに巻き込まれてしまった。男も女も押し寄せて30分は動くことが出来ずに揉みくちやにされ、やっと開放されたと思った時には疲れ果てていた。村長が苦笑いで手招きをしていたので、となりの席に座る。バリーもグースもエレナも近くに座っていた。

「いやあ、申し訳ない。サージェントを一刀両断した話をバリー達から聞いていたら勝手に集まってきてな、どんどん話が大きくなった結果がこれという訳だ。」

「だからですか。一客人をもてなすには過ぎたパーティーだなと思っていました。」

「悪いな、静かに食事できた方が良かったらと思うんだけど、ワシの力不足だった。」

「気にしないで下さい、なんだかんだ言って楽しめていますので。」

「そう言ってもらえると助かる。」

そんなにあのオークは強かったんだろうか？ゲーム的にもそんなに強くなかったはずだが。そう考えてハツと思いつく。バリー達の装備は確か、ボーンハーネスのグラフィックだったな・・・。それが普通の村人の強さと考えれば、結構強かったのかもしれないな。

「驚いたでしょ！」

エレナがニヤニヤしながら話しかけてくる。

「はめられましたよ、エレナさん……。」

「ごめんごめん。またやるかもしれないけど許してね！」

この人駄目だ、どうにもならん。呆れていると、グースが口を挟んでくる。

「テレサってジョブは何なんだ？ 剣技も魔法もかなり使えるようだが。」

「私は今は赤魔道士ですね。」

「赤魔道士か……赤魔道士があそこまで剣を使えるようになるにはどれ位必要なんだか……。俺の認識は少し甘すぎたようだな。一から鍛えなおさないといけないかもしれない。」

そう言うと、グースは黙り込んで思索に入り込んでしまった。手持ち無沙汰になった俺は次にバリーを見てみる。すると何故かバリーは俺と目を合わせるのを拒否するように目を泳がせる。気になるので聞いてみよう。

「どうかしたんですか？ バリーさん。目を合わせないようにしているみたいです。」

そう聞くと、バリーは顔を真っ赤にして手を横に振りまくる。

「何でもないんだ、気にしないで欲しい。いや本当に！」

「最初あなたのことを起こしに行ったのはあたしじゃなくてバリィなのよ。それで彼が私に泣きついてきたの。」

「頼むエレナ、それ以上は言わないでくれ！」

懇願するようなバリィ。悪魔のようなというのが相応しい微笑を浮かべながらなおも続けるエレナ。

「思い出して、テレサ。起きた時あなたがどういう格好だったのかを！」

「ああ、そういうことですか。」

「すまなかった！下心なんて全く無かったんだ！」

ここは怒るべき時なんだろうか。正直ちょっと前まで男だった俺的には胸くらい見られても何とも無いように感じる。が、俺がもしバリィと同じような状況に立たされたら完全に土下座していただろう。自分が無計画なのも悪いんだし、ここは最大限便宜をはかってあげよう。

「あんな格好のまま寝てしまった自分が悪いので気にしないで下さい。寧ろ起こしに来てくださったのに不快な思いをさせてしまったすみません。」

「不快だなんてとんでもない！」

「そうよね、だってバリィは良いもの見られたしね！」

「エレナさん、流石にそこまで言われると恥ずかしいです。というか自重してください。」

えー、面白いのにと不満を言うセレナを宥めながら話を逸らした。ここでようやくバリーもグースも正気を取り戻したようだ。ふうー、これでやっと一息つけるな。

しばらくして、バリーが戦ったオーク達について話しかけてきた。

「そーいや気になってたんだけどさ、オークを倒した後、何か光が出てきてたけどあれって何？」

「えっと、クリスタルを手に入れただけですけど。」

そう答えると、村長・バリー・グース・エレナが揃って訝しげな表情を浮かべる。

「クリスタル・・・？」

「はい、これですね。」

持っていたモグサックから炎のクリスタルを取り出して見せる。4人はそれを見て呆気にとられているようだ。これは、かなりデカイ地雷を踏んでしまったかもしれない。

「え、本物のクリスタルかよ！」

思わず、といった感じで声を上げてしまったバリーのおかげで集会所の村人達全員が寄ってきてしまった。

「首都の宝物庫にもたった一つしかないっていうあの!？」

「キレイ・・・。」

「美女が持つと絵になるな。」

再び騒然とする集会所。どうすればいいか分からずオロオロとしていると、頼れる村長がその場をまとめてくれる。

「皆のもの、良く聞け。我らの恩人は少し特別なようだ。だがだからといって変な気を起こすなよ。我らに出来ることはテレサさんを快く送り出すことだけと言うのを忘れるな。」

そしてバリーに落とされる拳骨。バリーは騒ぎを大きくしてしまった自覚があるようで、文句も言わず謝ってきた。大丈夫と伝えたと、ホッとしたようで安堵の表情を浮かべた。

「しかし、テレサさん。そのクリスタルのことは必要があるとき意外は口外しないほうが良いかもしれないな。あなたの口ぶりからすると珍しい事とは認識していないようだ、この大陸でクリスタルの価値と言うのはそれこそ国宝に匹敵してしまうのだ。良からぬ事を考える輩がいらないとも限らん。」

そうだったのか・・・あんな店売り1個12ギルのクリスタルの値段がそんな事になっているなんて。確かに首都で知られた日にはまづいことになりそうだな。クリスタルに関することはなるべく隠すようにしておこう。でも、何でクリスタルが珍しいんだろう？

「クリスタルって戦利品で入手できないんですか？」

「2000年程前は敵からの戦利品として入手できていたようだが、今は手に入らん。私に言わせれば、クリスタルを敵からの戦利品として入手できていたという話の方が信じられないと言わざるを得ない。しかしそれも今日までだ、テレサさんという実例が現れてしまったからな。」

身の危険を感じるような話を聞きながらこれからの生活に不安を抱く俺だったが、その日は開き直りパーティーを楽しんだ。まあこれからじっくり考えていけば良いだろう。何しろ時間は腐るほどあるし、現実世界に帰れるかさえ分からないんだからな。

8話 クリスタル（後書き）

※用語解説

・ボーンハーネス

↓16レベルから多数のジョブが装備できる頼もしい装備、ただしグラフィックがあまり良くありません。

・クリスタル

↓ある状態で敵を倒すと入手できる宝石の様な物。合成に必要で、属性別に色が分かれています。

・モグサック

↓モググリが格安で配布してくれる袋です。他のMMO風に言うと追加インベントリって感じですね。

9 話 合成（前書き）

劇中に出てくるエルヴァーン、タルタル、ミスラ、ガルカ他獣人多数の名前にとっても悩んでいます（ほぼ全部じゃねえか）。

9話 合成

アルディ村に滞在し始めて5日が経った。俺は今ゲームから200年経ったこのヴァナディールがどんな風に変わっているのかを確かめるためにこの村でお勉強中だ。といっても村に書物なんかが沢山ある訳ないので、冒険者をやっていた事もある村人に話を聞いて回っているだけだ。その中でもやはりというか見た目で何かやっていただろうと分かる村長のドンの話は役に立った。ゲーム中の情報と何が違うのか見極める為に一度情報を整理してみようか。

この世界はヴァナディールと呼ばれていて、今俺がいる所はというと中の国の大陸の1つ、クオン大陸の真ん中あたりにあるジャグナ―森林の中だ。

この中の国というのは1つの国のことを指している訳じゃない。アルタナ5カ国連合があるクオン大陸・ミンダルシア大陸とその他諸々の島を含めた一連の地域がある場所を総称しての呼び名だ。ちなみにこの中の国という言葉は中の国で生活している人間はあまり使わない。それ以外の大陸の人間がこの地域を指す時に良く使われる。

現在地のクオン大陸だが、この大陸には様々な勢力が存在している。人間側はサンドリア王国・バストワーク・ジュノ大公国・タブナジア王国だ。サンドリアは耳が長い種族のエルヴァーンが主体の国で、バストワークは現実世界の人間に近いヒュームと獣人に見間違われる事もある巨軀のガルカが主体、ジュノ大公国とタブナジア王国は

混成の国となっている。

この世界に暮らしている人と呼ばれる者には2種類があり、「人間」と「獣人」に分かれている。「人間」と呼ばれているのはヒューム・エルヴァーン・タルタル・ガルカ・ミスラの5種類で、女神アルタナの涙から産まれたと言われている。それに対して獣人というのはそれ以外のゴブリン・クウダフ・オーク・ヤグード・アンティカ・トンベリ・サハギン・デーモン・ギガース等の事を言う。大体の場合、「人間」と「獣人」は敵対している事が多い。クオン大陸に根城を構えているのはデーモン・オーク・クウダフでオークとクウダフはそれぞれサンドリア、バストウークと激しい戦いを繰り返している。

ここからが俺が知らなかった情報だ。俺がプレイしていたFF11ではアルタナ5カ国連合ではなく4カ国連合だった。何故ならタブナジア候国は220年前の水晶大戦という大規模な戦争で獣人血盟軍の大戦力に滅ぼされてしまっているのだ。その様子はFF11を始める時のムービーでも見ることが出来る。生き延びた少数の人々は候国から少し離れた地下壕で暮らしていくしかなかった。

ここまではゲーム中でも語られる。問題はその後で、5年後この地下壕にある傭兵団を率いた男——滅亡したタブナジア候国の正當な王位継承者で後にタブナジアの初代国王となる——ロシュフォーニユがやってきて、タブナジア復興を宣言した。祖国復興の希望を得た地下壕の人々は喜んでこれに協力したらしい。復興の速度は驚異的なもので、噂を聞きつけた商人・農民・傭兵が続々と集まり僅か5年でタブナジア候国跡地の奪還・復興に成功し、ここにタブナジア候国が完全復活した。

ロシュフォーニユの傍には常に2人の腹心の部下がいて、名前をヴ

オーダラム、ミルドリオンと言った。ヴォーダラムは傭兵団の首領で、その当時仕えるべき国が無かった事から最初は形式的には傭兵団としていたが、候国が復活すると以前から名乗っていた騎士団へと正式に名前を変えさせた。これが200年後の現在、中の国最強と言われるヴォーダラム騎士団が出来た経緯だ。もう1人のミルドリオンはその名前はかなり有名なのだが残っている功績が少ない。確認出来るのは数が減ってしまったモーグリ達の業務を助けるために冒険者互助会に働きかけ、多くの貴重な人材を提供したという情報しか残っていない。

「ふう。ドンさん、今日も長い間付き合せてしまって申し訳ありません。」

「いや、いいさ。ワシも昔話に花を咲かせる事が出来てなかなか良い時間を過ごせておるよ。それよりも済まん。客人であり恩人でもあるテレサさんに家事手伝いなどしてもらってしまっ。」

「いえ、出来る事はさせてもらわないと私の気が済みませんから気にしないで下さい。」

調理スキルが高かったためか知らないが、食材を前にして包丁を持った瞬間に料理の仕方が分かってしまったのには驚いた。これは情報を手に入れる交渉材料として申し分ないと感じたので自分から家事手伝いを志願した。なかなか好評のようで、俺に手伝いを頼もうとしてくる村人も結構増えた。こうなればこちらのもので、掃除をしたり料理をしたりしながらさりげなく質問して少しずつ情報収集

していると言う訳だ。まあ交渉とか言ってはいるが、役に立てたのが純粹に嬉しいと思ったのもあるんだけど。

村長に別れを告げて歩き出す。歩きながらこれからやろうとしている事を考えてみる。ジョブチェンジって出来るんだろうか？ゲーム中ではモグハウス——自キャラのために用意された拠点でここでもしか行えないことも多い——でモーグリに話しかけないと選択肢すら出ないんだが、現在はモーグリが少なくなっているらしくマンツーマンでの世話をしてくれなくなってしまったのだという。

何か手がかりになる物は無いだろうか。いつまでも赤／黒でいても状態異常回復が出来ないから役に立たないのだ。黒をサポートジョブにする利点としてデジョンⅠ・Ⅱ、エスケプなどの魔法があるが現在の所全く使い道が無い。それならばサポートジョブを白魔道士にするかそもそも赤魔道士ではなくなるかしたほうが幾分かマシだ。

小屋に戻ってきた俺はカバンを漁ってみる。当然俺が持っていた装備品やら何やらがあるばかりで手がかりなど無い。諦めた俺はベッドに仰向けで倒れこんだ。そう何もかも上手くいくもんじゃないよな。もう少し情報を集めてからでも遅くはないはずだ。

そんな事よりこれからどうするかだな。村を出た後は一応サンドリアに行ってみようか。俺の記憶と一緒にサンドリア周辺は弱いモンスターしか生息していないから旅をしても安心だろう。サンドリアに着いたら更なる情報収集のためにどこかで働いてみようかな。どうせ行き先も分からないんだからちよつと滞在することになったって構わないし。ゆくゆくはタブナジア王国とやらにも行ってみたい。そうだ、モグハウスで何が出来るかも調べないと。ジョブチェンジ出来ると良いんだけど・・・。

考えてみると、やることは山積みだな。さて、飯でも作るか。今日はちよつとやってみたい事があって材料を分けてもらってきたのだ。野兎の肉・乾燥マージョラムを使って調理の素人レシピの野兎のグ ril を作ってみようかと思っている。重要なのが、クリスタルを使うことで何か変わるのだろうか。ゲーム中のプレイヤーは何かを合成する時には必ずクリスタルを使わなければならないかった。クリスタルが失われた現在では、何かを作るのに当然クリスタルを使わないでの作業になる訳だ。じゃあ、クリスタルを使えばどうなるのか？という別にどうでも良い事を確かめようとしているのだ。

「野兎のグリルの説明って確か網焼きだったと思うんだけど、網なんて持ってないからなあ。仕方ないからフライパンで作ってみるか。」

調理器具なんて包丁とまな板とフライパンくらいしか置いてないしな。贅沢は言ってられない。まずは何もしないで普通に焼いた物を作ってみる。俺は生肉が食えないので良く焼く。すると、出入り口のドアを叩く音が聞こえた。

「どうぞ」

「料理中だったのね。お邪魔かしら？」

エレナが小さな樽っぽい者を抱えて入って来た。何だろう？と思いながら返事をする。

「いえ、問題ありません。食べ切れない位作る予定なので、ご一緒にいかがですか？」

「あら、美人の料理が味わえるなんて最高じゃない。丁度良いわ。これ、実はお酒なの。テレサにお裾分けしようと思って持ってきたの。きっと料理にも合うでしょう。」

「ありがとうございます、すぐ作り終わりますのでちょっと待って下さいね。」

酒か・・・飲めないんだよな。付き合いでのみに行ったときに無理矢理飲むだけで精一杯だったからな。いや、料理の味付けには良さそうだな、ありがたく使わせてもらおう。そうこうしているうちに野兎のグリルが出来上がった。そのままでは大きいので切り分け、村長の家に行く前に焼いておいたパンと一緒にテーブルに置いた。

「はい、冷めない内にどうぞ。あ、エレナさん。同じ料理をもう一回作るんですけど、ちょっと試したいことがあるのでお腹一杯までは食べないでもらえますか？」

「ええ、分かったわ。じゃあ、早速。いただきますーす。」

美味しい！家に嫁に来い！とか話しかけて来るエレナを無視して台所に向かう。じゃあ、本命の方に取り掛かろうか。置いてあったモグサックから炎のクリスタルを取り出し、手に持つ。最初にクリスタルを手に入れた時から何故だか知らないが薄々と使い方が分かったのだ。合成をする時に必要な現象を願えば良いだけだ。この野兎のグリルに必要な火力をお願いして・・・。

炎のクリスタルは手の中で赤い光に変わり、掌に炎が現れた。竈に火を置き、調理を始める。鮮やかな光がフライパンの周りで舞い踊っているのが見える。野兎の肉に吸い込まれていく光を見ているのは結構面白い。・・・よし、これ位かな。手早く皿に乗つけて切り

分ける。さあて、何が変わってるんだろうな。

皿を持って後ろを振り向くと、エレナが呆然とした顔——それも超が付くほどの間抜け顔だ——で俺の事を見ている。グリルをテーブルの上に置き、エレナの顔の前で手を振ってみる。

「エレナさーん？聞こえますかー？」

「天使様・・・？」

はあ？遂に頭がお花畑に逝ってしまったのか。ぼーっとして動かないので、肩を揺すってみる。

「エレナさん、しっかりして下さい。」

「あ、ああごめんね。折角作ってくれたんだから食べないとね。」

そう言って料理を口の中に入れる。少し口の中で味わっていたが、急に動きが止まった。何やら恍惚とした表情をしている。トリップか・・・トリップなら俺がしたいんだけど。俺も食ってみるか。

うーん、さっきのよりは美味いがあんな表情を浮かべるまでに美味いかと聞かれればそこまでではないだろう。一体何が起きているんだ。考えていると、ようやくエレナがトリップから戻ってきたようだ。

「あなたって本当に不思議な娘なのね。」

料理を食べ終えた後、エレナは恍惚とした表情のまま帰っていった。まだまだ分からないことが沢山ある。クリスタルを使えば普通に作

るよりも高品質なものが出来上がるらしいということ位は分かった
だけでも良しとおこうか。

9話 合成（後書き）

※用語解説

・野兎のグリル

↓初心者のためのリーズナブルな食事です。効果時間も長く、攻撃力上昇も申し分ない理想的な食事と言えます。

・食事効果

↓FF11では、食事をアイテムとして使うことが出来、様々な恩恵を得ることが出来ます。用途毎に食事の種類があり、競売を見ているだけでも結構暇を潰せます。

・調理

↓戦闘、魔法とは異なる合成スキルの中の一つです。食事を作ることで出来ます。消耗品を作るため、儲けるには薄利多売で勝負をすることになります。

・天使

↓女神アルタナの使いみtainな意味で使ってます。深く考えないようお願いします。

10話 隣村の危機

クリスタルを使って合成するということは、作ろうとしている物の中にクリスタルが持つエネルギーを埋め込むということなんだろうか？野兎のグリルを作っている時も炎のクリスタルの粒子っぽいのが中に入っていた。俺がゲームをプレイしていた時代の人間達はクリスタル合成で作った装備や食事を利用していたが、それが合成の正体か？装備品に関してはまだ不明だが、食事に関してはエレナの身に起きたことが食事効果なのだろうか。クリスタルと合成については謎が多すぎるな。俺以外に実践できる人間がいない以上、手探りで探っていくしかないさそうだ。そういえば、公式のページにクリスタル合成の歴史についてみたいのが載っていたっけ。どんなだったかな・・・

クリスタル合成は、クオン大陸・ミンダルシア大陸を繋ぐ漁村であるジュノにおいてカムラナート・エルドナーシュ兄弟によって初めて伝えたとされている。当時小さな漁村であったジュノは兄弟の奇跡とも言える合成によって急激に成長した。この功績によりジュノの住民は兄弟に村の代表に就くよう要請した。2つの大陸を結ぶ好立地であったという事も手伝い、兄弟に率いられたジュノはたった数年で主要3国であるサンドリア・ウィンダス・バストワークを超える経済大国になるまで発展を遂げた。

とかこんな感じだったかな。そう考えてみれば、なるほど俺がやったことも奇跡になってしまふんじゃないか。クリスタル合成は出し

所が難しすぎる。一步間違えれば身動きが取れなくなるだろう。俺は30分ほど考えた後、1つの結論に達した。そうだ、見なかったことにしよう。街を移動して合成するたびにあんな驚愕の表情を向けられ、天使様等と呼ばれるなんてストレス以外の何者でもないし、そんな事をしていれば命が狙われる事態にもなりかねない。皆と同じように普通に飯を作って、普通に職人してれば良いや。事情を知ってるだろう召喚獣あたりに会う事があればそれとなく聞いてみることにしよう。

さてと、そろそろ夕飯時だし約束の仕事に行くか。今日は村長の家
の隣に住んでるエルヴァーンの老夫婦の所に手伝いに行くんだった
っけな。老夫婦は村長に続く知識の持ち主で、色々な事を教えてく
れる。俺の事を気に入ってくれたみたいで、まるで本当の孫のよう
に接してくれる。孝行してやる前に死んでしまった現実世界の爺さ
んと婆さんを思い出して泣きそうになってしまったのは内緒だ。

老夫婦の家に着き、ドアをノックする。

「ヨハンさん、ミレーヌさん。夕飯の手伝いに来ました。」

玄関に出てきたのはミレーヌ婦人で、村の出身だというのに何故か
貴族のような気品がある。貴族が実際にはどんな物か知らないので
あくまでも勝手な想像によるイメージでしかないけど。

「あらいらっしやい、テレサちゃん。今日はあなたが来てくれるつ
て言うから2人して楽しみに待っていたのよ。」

「何を言っとなるんじゃお前は。たかだか手伝いに来るだけなのに大
げさじゃわ。」

奥からヨハン爺さんが気だるそうな声を上げてくる。

「何を言っているのはこっちの台詞ですよ。まだか、まだかなんて窓の外をしきりに覗いてた人の言う言葉ではありませんよ。」

「そ、そういう裏側の事は言ってはいけないと一体何回言えば分かるんじゃ！」

この人達本当に仲良いよな。結婚するとしたらこういう関係を築きたいもんだ。しかし現実世界の俺は27にもなったのに彼女1人しか出来たことないし関係ないといえばない。あ、この世界では女か。そっちの気はないからこれから一生結婚することはないのかもしれない。

「今日はポトフを作りましょう。外に色々材料があるから取りに行きましょうか。」

「はい。」

「ちょっと待たんか。来てくれたばかりのテレサにすぐ手伝わせるのかお前は。」

「私はミレーヌさんの料理が見られるのが嬉しいので大丈夫です。」

「いや、しかしじゃな……。」

「お爺さんは楽しみにしてたお話が出来ないのが悔しいのよ。」

「ふざけるな。そんなじゃないわい！」

「あら。じゃあいいわよね、さあテレサちゃん行きましょう。」

しゅん、という感じでうなだれるヨハン爺さん。悪いけど俺なんかよりあんたの方が断然可愛いよ。このヨハン爺さん、堅物は堅物なんだが構われるのも好きなようで、褒めたりおだてたりするとかかなり上機嫌になる。俺は仕事場では当たり障りのない人間関係しかなかったが、同僚や上司の機嫌を良くする方法位は心得ていた。FF11に夢中になりすぎていたため機会が少な過ぎただけで、実際悩みを相談されたりすると良く聞き上手だね等と言われることがあった。そんなスキルを爺さんに実行した所、2時間程ノンストップで話を続けられてしまい参ったのが3日程前の事だ。その日からずっと心待ちにしていたようだから悔しいんだろう、って俺はキャバ嬢じゃねえぞ。

庭にある木箱から料理に必要な野菜を取り出していく。ポポトイモにサンドリアカロットにシモカブか。ポトフは確か肉と野菜を出汁で煮込んだスープだったな。巨大な大腿骨で出汁をとって炒めた野兎の肉と野菜を煮込むと。何かカレーを思い出すな。カレーは毎日煮込めば日持ちするから一人暮らしにはもやし料理同様神の如き存在感だった。手の込んだ料理なんか作れない俺にとっては・・・

・・・ん？デカイ体のナニかが全速力で駆けて来る。その視線の先には俺がいるようだ。段々近付くと、それがグースだと分かった。すごい形相でこっちに走ってくる。怖いよガルカにそんな事されたら。

「おおーい、テレサ！大変な事になった、ちよつと集会所まで来てくれ！」

肩で息をしながら俺に話しかけてくるグース。一体何があったんだ

ろうか。その通りに聞いてみる。

「一体何があったんですか？」

「その事なんだが、詳しい話を話すなら集会所のほうがいい。とりあえずは隣の村が危険という事だ。」

戦闘絡みか。何かに襲われたんだろうか？はい、と言いかけたがミレーヌに遮られる。

「それは村の男達では対処できないの？お客さんなのよ、テレサちゃん。そんな危険に巻き込むつもりなの？」

「いや、そこは俺達も相当悩んだんだが、状況はかなりまずい事になっていくらしい。下手したら俺達の村も全滅の危険があるそうだ。悪い、頼む。」

グースは気まずそうな顔で俺を見つめ、頭を下げる。まるで今にも土下座をしそうな雰囲気だ。

「ごめんなさい、ミレーヌさん。私、行ってきますね！」

「そうかい、テレサちゃん自身がそう言うんじゃない止める事は野暮ってもんさね。頑張っていてらっしゃい。」

「はい、頑張ります！」

「本当にすまん、恩に着る。」

集会所に駆け込むと、村の男衆全員と魔法を使えるらしい女性達――皆ローブを着ているのですぐに分かった――が勢ぞろいし、中央には村長が座っていた。

「遅くなってすみません。」

すると、村長はこちらへと言いながら同じく中央の村長の目の前で向き合う席に手を向けた。私がそこに座って息を整えると

「テレサさん、いきなりで本当にすまない。まずは状況を説明しておこう。実は一昨日からゴブリンの斥候が隣村の近くに現れだしてな、様子を見ていたようだが昨日かなりの数のオークとゴブリンが目と鼻の先に陣を張ったそうだ。それを見た隣村の村長が慌てて両隣に使いを出したが、時間的になかなか厳しい。だからワシらも大慌てで準備したという訳だ。そしてここからが本題なんだが、テレサさん。あなたの力をワシらに貸して欲しい。冒険者のクエストとして受けてもらえないだろうか？報酬はワシらの出来得る限りを用意させてもらおう。」

俺の身にも危険が及ぶとなりやその降りかかる火の粉を払わない訳にはいけない。なんと说着てもこの村が気に入ったしそんな村での平穏を奪われるのは癪だ。

「そんな、報酬なんてこの村に滞在させてもらってるだけで充分です。この村にはお世話になりっぱなしですし手伝わせてください。」

「あなたはそう言うと思ったがね、残念ながら報酬無しは認める事が出来ないクエストだ。ワシらの気持ちと思って受け取ってくれ。」

「・・・分かりました。自分にどこまでやれるかは分かりませんが、そのクエストお受けします。」

「ありがとう。」

村長がそう言うのと、周りの皆も呼応したように礼を言う。こういう雰囲気は照れるので長居したくないし、隣村もやばいはず。さっさと出発してしまいたいな。と思っていると、やはり村長が皆をまとめた。頼れるよな、村長。

「よし、皆の者、ゴブリンとオークなど恐るるに足りん。全員叩っ斬ってくれようぞ！」

「「「「「「おう！」「」「」「」」」」」」

その場にいた村人達全員の心が一つになった瞬間だった。っていうか村長、あんた時代劇の主役かよ。

10話 隣村の危機（後書き）

※用語解説

・クリスタル合成

↓ジュノ大公カムラナートが伝えたとされる技術で、クリスタルを使います。

・カムラナート

↓ジュノの君主だった人です。200年後の現在はどうかまだ不明です。

・召喚獣

↓召喚士が使役できる獣の事ですが、召喚士が呼び出すのは召喚獣本体ではなく、力の片鱗のような存在です。契約を交わすと使役できようになります。

・ポトフ

↓狩人に必要なステータスが上がる食事です。村人が作る料理自体にはステータスアップ効果はありません。

11話 隣村での戦い（前書き）

やっと投稿できました。FF11も楽しいし書く時間がなかなか取れないですね。でも、FF11の世界観を考えながらストーリーを作るのもかなり楽しいんですね。

11話 隣村での戦い

もう夕方だが、今から強行軍で隣村に行くのだという。夜の森は危険だと言うのは素人の俺だって分かる事だから当然村長も分かっていると思う。それでも行くという事は状況はそれほどまでに悪いのだろう。俺達は最低限の装備を整え、食糧等を積んだ荷車をチョコボ2羽に引かせ村を出発した。隣村には急げば夜明け前に着く予定だそう。ここで、隣村とはどんな所か村長に聞いてみた。

「ドンさん、隣村ってどんな所なんですか？」

「ああ、アルディ村の3倍はあるちょっと大きい村だ。モリズ村という。」

「大きい村ですね。そんな村が危ないということは大規模な襲撃なんでしょうか？」

「そう聞いている。しかも昨日村からチョコボで駆けて来た使いの話だと、拠点を作っている気配があるらしい。」

「本格的に侵攻するつもりなんですね・・・。」

「ああ、さらに悪い事にこの件はゴブリンとオークが手を組んでいるらしいことが分かっている。」

「オークに雇われたんでしょうか？だとしたら拠点を作るほど人数が集まっているのも理解できますね。」

「これはワシの推測だが、この前テレサさん達が出くわしたサージ

エントはこの事で動き回っていたのではないかな。普段はダボイにいて、ある程度の権力がある立場だからな。」

ダボイは200年経った今でもあるんだな。まだオークの拠点のようだ。220年前の一連の戦争は「水晶大戦」と呼ばれているが、この戦争以前はダボイには人間が住んでいて「ラヴォール村」と呼ばれていた。それが水晶大戦中、獣人血盟軍に襲撃され奪われたことを切欠にオークが支配する「ダボイ」となってしまった。村の真ん中にあつた修道院は今や——今もあるかどうかは分からないけども——オークの高位魔道士のねぐらと化してしまっている。

なるほど、村を襲撃する算段をつけていたって事か。それが自警団の3人と遭遇して今に至ると。そういえば拠点を築き始めたって言うけど、一体どれだけの数がいるんだろう？

「相手はどれくらいの戦力があるんでしょうか？」

「正確には分からないが、300は確実にいると言ってもいいな。」

「300・・・！？」

「ゴ布林共が物資の補給と兵員の提供に協力しているらしい。何か取引があつたと見るべきだろう。モリズ村は村としては大きい規模の物だし交通の要所でもあるから奪えればノルバレン地域では相当有利になる。ゴ布林やオークの襲撃は今に始まったことではないが、これほど大規模なのは聞いたことがない。」

300って何だ・・・？FF11内だとそんなに敵が出てくるのはアトルガンエリアでの市街地戦である「ビシージ」しか存在しない。やっぱり現実ゲームのようにはいかないよな。

アルディ村からの戦力は50人で、こちら側の全戦力は単純に計算すると全部で200人程にしかない。モリズ村が落とされてしまったら次は両隣の村が狙われるだろう。強行軍を組むほどの価値があるというもんだ。

「親父、奴らはもう攻めて来てるのか？」

「それはまだ分からん。さっきの伝令がワシらの村に着いてから何も音沙汰がないからな。」

「早く奴らをぶっ叩かねえとな。」

この一団には勿論自警団のPTも参加していた。彼らの実力は村の中でも高いほうで、修行をしているというだけの事はあるようだ。そんなPTのリーダー、バリーは初めての集団戦闘に興奮を隠し切れない様子だ。これから死ぬかもしれない戦いに突入するというのに元気だな。そんな彼の様子を見てPTのメンバー達は若干不安そうだ。

「バリー、冷静にならないと足をすくわれちまうぞ。」

グースは意外と冷静だ。ガルカは結構感情的な部分がゲームで描かれることが多いので、そんなイメージしかなかったが頼れる兄貴といった雰囲気を見て少し嬉しくなった。

「騎士になるんだったら人を守れるくらいにはならないとね。」

エレナにも痛い所を指摘され、タジタジのバリー。

「悪かった。熱くなりすぎて周りが見えてなかったよ。クソリーダーにはならないつもりだから見捨てないでくれ……」

プツと笑い出す2人。何もそこまで言う必要はないだろう。危うく俺も笑いそうになってしまった。不安な気持ちもあるが、楽しい時間を過ごす事ができた。空を見ると月は綺麗な紫色をしている。そうか、今日は雷曜日か……。やっぱりここは現実世界じゃないんだな。今更だよな、そんなの。この楽しい時間は嵐の前の静けさなんだろう。俺は皆の役に立つことが出来るんだろうか？ そんなとり止めもない事を考えながら歩き続けた。

「おい、あれを見ろ！」

誰かが叫んだその先には赤く光る空が見えた。村長が忌々しげに叫ぶ。

「クソ、もう攻めてきたのか！ 皆の者、離れずに一丸となれ！ 隊列から外れた敵共を各個撃破していくぞ！」

500メートル程先に進むと、オークとゴブリンの集団が今まさに村になだれ込んで来る所だった。村の中心の大きな広場で守りを固めている人間が見える。村長の言ったとおり150人程しかいなさそうだ。その集団の中心には白髪のエルヴァーンの老人が鎧を着込んで何かを指示するためにだろうか、大声で叫んでいる。こちらに気付いて微笑んだように思えたが、意思疎通を図っている暇はなさそうだ。

1人の村人を水の塊が強打した。オークの放ったウォータだろうか？村人が吹き飛ばされて意識を失う。にわかに浮き足立つ他の村人達。そのすぐ先に走りこんで来ているオークとゴブリンの集団が見える。これはまずい。先制されて浮き足立った集団なんて烏合の衆も同じことだろう。こっちも何か策を打たなきゃ・・・。

こういう時のためにクリムゾンクウイスを装備してきたんだよな。移動速度12%アップの両脚用神装備だ。ゲームでは12%アップだったが、何故かそれ以上で走れるような気がする。現実とゲームは違うか。俺は全力で駆けた。村の集団の先に回りこみ、魔法を練り上げ始める。後ろで息を呑むような音が聞こえてきたが、今は振り返る余裕はなさそうだ。今日は雷曜日・・・雷属性の魔法の効果がアップするはず。

「サンダガ！」

一番前を走ってきていた鎧姿のゴブリンめがけて範囲精霊魔法のサンダガを放った。周囲30メートル程の範囲内にいた獣人全てが紫電に飲み込まれる。ああ・・・民家も巻き込んだじゃったけど、怪我人いないかな、やばいな。10秒位発光しただろうか？その後に残った物はプスプスと音を立てている死体だけのようだ。更に後ろに控えている獣人達は突然の出来事に放心状態に陥っている。それじゃ、強化魔法を掛けさせてもらうか。コンポーザーってどうやって発動するんだろう・・・ああ大丈夫だ、頭の中にやり方が浮かんでくる。アビリティを発動させ、強化魔法を連発する。

「リフレッシュII、プロテスV、シエルIV、ヘイスト、フアランクスII、アイススパイク、エンサンダーII」

主な強化をほぼかけ終えた所で放心状態から戻ってきた味方が歓声を上げた。どうやら士気が上がったらしい。必死な俺はさっきと同じく必死なので気にすることさえできない。同じく放心状態から回復した獣人たちは怒りの雄叫びと共に突っ込んできた。走ってきたオークモンクの拳が俺に飛んでくる、が何かに遮られたようで届くことはない。反対に氷のエフェクトがオークを包み込み、オークモンクは動けなくなる。そこを袈裟懸けに切り裂く。獣人たちは俺を取り囲み、次々と攻撃を繰り返してくるが攻撃は全く通らない。オークモンクと同じように氷の反撃を受け、痺れた所を一体ずつ倒して行く。

周りから怒号が聞こえ始める。恐らく村人も獣人達と戦闘を開始したのだろう。剣戟音が耳にズキズキ響いてくる。

そうだ、TPはどうなってるんだろうか？ウェポンスキルは・・・ああ、これがTPの貯まる感覚かあ。敵一体にウェポンスキル使うのはもったいないから、ここは範囲のウェポンスキルにしておこうか。片手剣で使える範囲対象のウェポンスキルはサークルブレードだな。

「そおれ！」

魔法とは違う感覚の力——現代の漫画風に言うと「気」とか「オーラ」みたいに表現するのが相応しいか？それ以外思いつかない——を貯め、1人の敵に一気に解き放って叩きつける。すると、地面が隆起し、周りの敵も巻き込んで貫く。それだけやってもまだ敵の数は尽きる事が無く、どんどん押し寄せてくる。敵が襲ってくるたびに同じ事を繰り返し、敵を葬っていく。

どれ位時間が経ったのだろうか。ようやく向かってくる獣人達がい

なくなった。俺の周りは死体だらけで足の踏み場も無い有様になってしまっていた。よく考えれば、獣人とは言え「人」が付いている生物を殺しまくってしまった。

「うつ・・・」

あまりに血生臭い光景に思わず吐きそうになる。全力で堪えて前を見ると、一際大きなオークがこちらに歩いて向かってきた。どうやらこの戦の敵の総大将のようだ。コイツを倒せば他の奴らも引くかな・・・

と思っていると、オークが全力で走り出した。持っているハルバードで俺を突き殺そうとしてくる。しかし、他の獣人たちと同様に大きなハルバードもフランクスという空気の盾とも呼ぶべき魔法が通すことを許さない。氷がまとわりつき、動きが止まったところでウェポンスキルを放つ。ここは完膚なきまでに叩きのめす所を見せないといけない。そうやって総大将に勝てば残りはきつと逃げて行くだろう・・・逃げて行くはずだ・・・逃げてくれ。精神的に疲労してこれ以上続けたくない俺は高レベル用の片手剣ウェポンスキルを放つ。下から鋭く切り上げて上方に飛び、思い切り頭の上に剣を突き刺す。サベッジブレードと言われるウェポンスキルを受けたオークの総大将は見事に崩れ落ちた。

それを見ていたオークとゴブリンは奇声を上げながら逃げ去り始める。残り50人程の獣人達はあっという間に森の中に消えていった。しばらく放心していたがハッと我に返る。良かった・・・何とか村が全滅の事態は防げたか。ん？本当に防げたのか？不安になって、やっと振り向く事が出来た俺が見た物は、今にも踊り出しそうな2つの村の住人だった。顔は皆煤で真っ黒だ。俺の事を氣遣って、声を掛けなくてくれたのだろうか。それに答えるように微笑んで

その場にへたり込む。そこで歓声が爆発した。

2つの村を救った英雄が生まれた瞬間だった。

11話 隣村での戦い（後書き）

※用語解説

・ノルバレン

↓中の国はいくつかのリージョン（直訳…地域）で分かれており1つのリージョンの中に複数のエリア（ジャグナー森林等個別のマップ）が入っています。ノルバレンはその中の1つです。

・曜日

ヴァナディールは1週間で8日あります。順番は←です。

火↓土↓水↓風↓氷↓雷↓光↓闇

となり、それぞれの曜日と同じ属性の魔法は効果が高くなります。

・ウオータ

↓水の精霊魔法です。

・クリムゾンクウイス

↓作者が喉から手が出るほど欲しい脚装備です。速く走りたい……。

・サンダガ

↓雷の範囲精霊魔法です。

・リフレッシュ

↓MPを徐々に回復させる効果を持つ白魔法の強化魔法です。MP回復手段に乏しいヴァナディールでは相当重宝されます。

・プロテス・シェル

↓それぞれ物理防御力と魔法防御力を上げる白魔法の強化魔法です。

- ・ヘイスト

↓色々な行動が早くなる白魔法の強化魔法です。

- ・フアランクス

↓効果時間中、敵から受けるダメージを一定量カットする白魔法の強化魔法です。

- ・アイススパイク

↓敵からの攻撃が命中した際、反撃にダメージを与え、更に麻痺の効果を与える黒魔法の強化魔法です。

- ・エンサnder

↓雷を武器にまとわせる白魔法の強化魔法です。

- ・TP

↓ウェポンスキルを放つために必要なポイントで、敵に攻撃を当てると貯まります。

- ・ウェポンスキル

↓貯めたTPを消費して放つ必殺技のようなスキルです。

- ・サークルブレード

↓片手剣のウェポンスキルの1つです。範囲攻撃です。

- ・サベッジブレード

↓片手剣のウェポンスキルの1つです。単体攻撃です。

- ・コンポーザー

↓赤魔道士専用のアビリティです。少しのデメリットはありますが、その代わりに強化魔法の効果時間を3倍にし、更に自身の物理攻撃の命中率が上昇する便利な物です。

12話 大宴会（前書き）

全話を見直して矛盾を探していくのも中々楽しい物ですね。

※サンドリアの王都を首都と書いていた記憶がありますので見つけ次第直していきます。

12話 大宴会

やっと解放されたと思った時にはもう昼に近い頃だった。あの後、案の定周りを取り囲まれ長い事捕まった。さらに悪い事に俺が倒したオークやゴブリンからだけクリスタルが出てきてしまったので大騒ぎになってしまい、2つの村の村長が全力を出しても沈黙化にやたら時間が掛かってしまったという訳だ。

鎧を着込んだエルヴァーンの村長はラザールさんと言って、寡黙なドン村長とは違い気さくで饒舌な人だ。そのラザールさんは馬鹿騒ぎになってしまった事を謝り、他のアルディ村の助っ人達同様休息をとるよう勧めてくれた。

案内役として付けられたカティアという女性に従って歩いていると、真新しい大きな家に着いた。中はかなり綺麗にしてあり、高そうな絨毯やらお洒落な装飾やらで溢れかえっている。小市民な俺としては居心地が悪い家だが、まるで現実世界のホテルにあるようなベッドだけは高得点だ。

「着替えはこのクローゼットの中にありますので何でも好きな物をお召しになって下さい。」

「はい、ありがとうございます。」

お召しになって下さいなんて言われる事があるとは思ってもみなかった。正直鳥肌が立ちそうになった。というかこのカティアと言うエルヴァーンの女性、俺を見る目がマズイ。新興宗教か何かの教祖を見る信者的に目の奥が光っているような気がする。

「ありがとうございます、仮眠を取る前に少し体を洗いたいのですがどこかご存知ですか？」

「はい、村の西側に川がございますのでそこで水浴びが出来ます。ご案内しますね。」

至れり尽くせりなんだけど、付いて来られるのは勘弁だな。

「いえ、場所が分かったので後は1人で大丈夫です。」

「そうですか、では食事の準備をします。洗濯させていただきますので、今のお召し物を後でお借りしてもよろしいでしょうか？」

この汚れを落とすのは骨が折れそうだしお言葉に甘えるか。

「はい、お願いします。色々ありがとうございます。」

礼を言って頭を下げると、カティアは畏れ多いと言った感じで恐縮して部屋を出て行った。そこまで畏まらなくてもいいのにな。・・・よし、早速体を洗おう。オークとゴブリンの血と汗で体が酷いことになっている。着替えも貸してもらったことだし、さっぱりして寝たい。

出来れば湯につかりたいんだが、生憎中の国ではまだ各家庭に風呂を設置するという発想が無いようで、危険の少ない朝から夕方に川で水浴びをするんだそうだ。バスタオルは無いから大きめの布で代用しているらしい。石鹸でもあれば良かったんだが、ここに来てから石鹸の話なんて全く話題に出なかったから高いかそもそも存在しないかで手に入りにくいんだろう。

ゲームじゃそういう描写は皆無だったが、この世界で清潔さを保つのは中々難しそうだ。水浴びをするのも数日に1回だと言うし、お前らそんなんで大丈夫なのかと思わず突っ込みそうになってしまった。

村を抜けて西へちょっと歩いた所に川はあった。予想はしていた事だが、膝の高さほどこしか水かさが無い。水に付けた布で体を拭くしかないか。装備を外して、水の中に入る。

「うっ・・・冷てえ。」

決めた、いつか絶対ホルレーの岩峰に行って温泉に入ろう。こんな冷たい水で洗うばかりでこの先過ごしていく事はできない。ゲルスバにはオークが盛り沢山だろうが、必ず入らなくちゃな。それにしても女の体ってのは洗にくい。背中や下半身を拭く時、胸が凄まじく邪魔で、その胸を拭くにも時間がかかる。男の体の時は顔から足の先まで一息に洗う事ができていたので余計に煩わしい。

「さて、もう良いかな。早く帰って寝よう。」

体を洗い終わった俺は寝巻きに替えてカティアの所に洗濯物を出しに行った。何故かカティアは息切れをしていたが、どうでもいい事だったのでスルーした。さてと、それじゃあ食事まで寝るかな。

気持ちよく仮眠を取った後、俺を待っていたのは食事という名の大宴会だった。

「ガハハハッ！ いやああの時は本当に胸がスカッとしたわい。お嬢ちゃん、良くやってくれた！」

「アハハ、それほどでもないです。」

「またまたあ、謙遜しちゃって。」

酔っ払うと笑い上戸になる事が判明した村長のラザール。隣に座っていた俺は肩を抱かれ、引き寄せられて頬ずりされた。その気持ち、分かりますよ村長さん。上司に無理矢理キャバクラに連れて行かれた時にもその人酔っ払って同じ事してたしね。でも男としては爺に抱き寄せられるなんて勘弁だわ。苦笑いをしていると、アルディ村とモリズ村双方の面々から突込みが飛んできた。

「ジジイ、酔っ払ったからは理由にならんぞ。」↑ドン村長

「ラザール村長、その行動は有り得ません。」↑バリー

「相変わらず好色な爺さんだな。」↑グース

「テレサさん、こんな爺さんの言う事なんて聞かなくていいのよ？」↑エレナ

「殺す。」↑カティア

皆言っていることは一様に酷いが、カティア、殺すはまずくないか？ 目も血走りすぎてマジで怖い。そして袋叩きにされる村長・・・威厳も何もあったもんじゃない。

「テレサ様、お気を悪くしないで下さい。諸悪の根源は断ち切りました。」

「い、いえ……。気にしていませんから大丈夫です。」

勝手に様にランクアップされてしまった。カティアのキャラは強烈の一言だな。

「うぐぐぐ。して、テレサちゃん。大量のクリスタルが倉庫にあるんじやが、あれはどうするのかの？」

そうなんだよな。クリスタルが取れない今、あの量の管理は流石に俺の手に余るし捨てる訳にもいかない。かといって村に置いておいても保管できないだろう。とすると使ってしまうしかないが、一体何に使うか。

「私もどうすればいいのか分からないので、この村にいる間に考えさせてもらってもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わんよ。何せ英雄の頼み事じゃからな。」

英雄はやめて欲しいと何度も言っているんだが聞き入れてくれないんだ。その言葉を聞くとびに恥ずかしくて顔が赤くなってしまう。

「ありがとうございます。」

「ところで、テレサさん。あなたはこれからどこに向かうつもりかな？」

ドン村長が聞いてきた。重要だよな、これから向かう所は。少し前

にも考えてみたが、やっぱり王都に行ってみよう。今の段階であそこ以上に情報が集まる所は他の国の首都くらいしかないだろうしな。

「取りあえず王都に行きたいです。」

「そうか。何か調べ物をするならうってつけだし、ジュノと通じる船も出ておる。」

船というと、飛空艇か。パスは200年前の物じゃ流石に駄目だな。そこはついてから考えるか。どうせ王都でしばらく滞在する予定なんだし。

「じゃあ俺も一緒に行」

「お前はまだ駄目だ。」

付いて行くと宣言しようとするバリーをドン村長は先手を打って否定する。

「何でだよ！俺も騎士団に・・・」

「お前は先の戦いで何が出来た？仲間がいなければ死んでいた所だったんだぞ。自分でまともな判断さえ下せないような奴と一緒にいれば、確実にテレサさんの重荷になってしまふぞ。」

「う・・・それは否定できないな。」

村人達の戦いについては特に何も聞いていなかったがそんな事があったのか。後日それとなく状況を聞いてみようかな。

バリーは自分の不甲斐なさを認めて俺とは一緒に行かない事になった。俺としては旅の道連れとして誰か一緒に来てもらった方が良かったが、ドン村長の強い言葉の後じゃ言いにくいし、何も言わないでおこうか。寧ろ次会った時の成長が楽しみと考える方が良いな。

その宴は皆が酔いつぶれて寝てしまうまで続いた。さて、旅立つまでの数日間は忙しくなりそうだ。まずはクリスタルの処分方法を考えないとな。

12話 大宴会（後書き）

※用語解説

ホルレーの岩峰

↓サンドリア王都に近い場所にあるオークの前線基地を「ゲルスバ野宮陣」といいますが、その中にホルレーの岩峰というエリアがあります。温泉が山頂近くに湧いていて、景色を眺めながら温泉に入ることができます。入るといっても温泉の中で感情表現の座りモーションをするだけです。

13話 修理（前書き）

- ・オリジナル要素を混ぜます。

- ・まとめ切れませんでしたので、旅立ちはアルディ村に帰ってから1話で終わらせようと思います。考え無しだな、自分と思った瞬間です。

13話 修理

大宴会の翌日、俺はクリスタルの山を目の前にして考えていた。

「どうすればいいんだ？こんな量……。」

倉庫には大量の炎のクリスタルと少しの雷のクリスタルが200個以上積まれている。合成するにしても、これだけのクリスタルを消費するためには材料が必要な訳だが、素材なんて何もないんだよな。飯でも作ればいいんだろうけど、エレナみたいになられても困っちゃうんだよな。

悩んでいると、どこからか金属音が響いてきた。これは……何か作っているんだろうか？何かヒントが得られるかもしれない。行ってみようか。

歩いていくと、工房のような場所から音が出てきているのが分かった。恐る恐る中に入ってみる。すると、中には作業着らしきものを着たガルカが一心不乱に何かを金槌で叩いている。ああ、このガルカのフェイスは馴染みがあるものだ。額から頭のとっぺんまでが禿げ上がった通称禿げガルに近寄ると、ガルカは気付いて人懐っこい笑みを浮かべて声をかけてきた。

「おう、テレサのお嬢ちゃんか。どうした、何か用か？欲しい武器でもあるか？」

「何かを作ってるのかなと思ってきてみました。ただの好奇心です。それで、あの……お名前は……。」

この村で有名になってしまったのが原因か、先方が自分の名前を知っているのにこっちは何も知らないというのが申し訳なく感じてしまい、名前を聞いた。その様子を見透かしたようにガルカは答える。

「ああ、お嬢ちゃんに気い使わしちまったか。やっちまったな。すまねえ、俺の名前はザビゴってんだ。で、見ての通りこの村で鍛冶屋をやらしてもらってるガルカだ、よろしくな。」

のっそりと立ち上がり、にっこりと笑って手を差し出してくるザビゴ。オークにもここまで大きい奴はいなかったんじゃないか。ガルカの中でも特に大きく、2m50cmはあると思われる体格のザビゴの手は反則的にデカかった。手を握ろうとしたが、俺の手では指2本を辛うじて触れる位しかできず何とも間抜けだったので、両手を差し出して握手をした。

「テレサです、こちらこそよろしくお願いします。」

実を言うとかかなりビビった。2メートル半もある巨体が向かってくる様はかなり迫力があり、多分であるが150cm以下しか俺の身長はないと思われるのでギャップも相まって相当な衝撃を受けてしまった。親切にしてくれようとしているザビゴに申し訳が立たないので何とか踏ん張って驚きを隠しながら微笑むことができた・・・と思う。

「こんな汚ねえ場所だが、自由に見てってくれ。分からない事があったら何でも聞いてくれれば良いからな。」

「ありがとうございます。早速なのですが、ここでは武器を作っているんですか？」

「作っちゃあいるが、今は違う。昨日の戦いで村の奴らが使ってた武器の殆どが使い物にならなくなっちゃってなあ。そいつらを打ち直して何とか使えるようにしているって訳よ。鍛えてるつつつても所詮村レベルのモンだからどうすれば武器を壊さず使えるかなんてわかりやしねえのさ。まあ最も、作ってる俺でもそんな事分かんけどな。」

そう言って豪快に笑うザビゴ。なるほど、武器は駄目になることもあるし修理することもできるのか。FF11じゃ装備に耐久度が設定されてなかったから一度手に入れば装備するときに何の気兼ねも無く使えてたんだよな。

修理ってどうやるんだろうと思っていると頭に情報が流れ込んでくる。便利過ぎる気がしないでもないが、鍛冶も60まであげてたし問題ないのかな。方法は2種類あるようで、普通の鍛冶屋と同じように金槌で叩いて直す方法とクリスタル合成で直す方法が頭に浮かんだ。

おっ、やっとクリスタルを消費する方法が見つかったじゃないか。使えなくなった武器も山と積まれている事だし、ここらへんのを全部修理させてもらおう。

「ザビゴさん。私も修理できるんですが、手伝わせてもらってもいいですか？」

「お嬢ちゃんがかい？言っちゃなんだが、疲れるし汗だくになるし汚ねえ仕事だぜ。やることはきっちりやってあるんだから休んでて構わねえんだが。」

「手伝える事があったらやらないと気が済まないので気にしないで

下さい。それに、汚れ仕事は嫌いじゃないんです。」

「そうかい、そこまで言うんだったら俺からは何も言わん。ただ、怪我だけには気をつけてな。美人が台無しになっちまう。」

「はは、ありがとうございます。」

自分で言うっておいてアレだけでも、いきなり来た小娘に工房を使わせてしまつて大丈夫なんだろうか。村を救うのにかんりの貢献をしたというのは理由としては大きいと思うけども、親切すぎて逆に心配になつてしまふ。まあ今はそれは置いといて、早速修理してみようかな。

武器の山の一番上に置いてあつた剣を手にとつた。シンプルな黄土色の片手剣で、低レベル用の物となると、ブロンズソードか。打ち合った為、切れ込みが入ったり潰れてしまつたりしてとても使い物になる代物ではない。最初にこれを直してみようか。

俺は合成（といつて言い分からないが）をするために片膝を地に着けた。FF11ではおなじみのポーズだ。一旦剣を地面に置き、懐から出したクリスタルを両手に持つて力を込め、炎に変える。炎を右手に持ち、置いてあつた剣を左手で拾い上げて2つを合わせる。すると、炎を纏つた剣は浮遊し始めた。さらに力を込め続けると、10秒程経つた所で暖かい空気が弾けて剣が地面に落ちた。

剣を手にとつて見てみる。先程の傷は綺麗に消え去り、刀身は薄暗い工房の僅かな光でも反射して美しく輝いている。ザビゴの仕事がどんな物かは分からないが、上出来と言つても良いんじゃないかな？

「驚いたな。お嬢ちゃん、悪いがその剣ちょっと見せてくれねえか。」

「ザビゴがさっきとは打って変わってビックリする位真剣な顔で話しかけてきた。あ、やり過ぎてしまったか。面倒な事になっちゃうかな、と思いつながら答える。」

「は、はい。どうぞ」

ブロンズソードを穴が開くのではないかと思うほど見つめるザビゴはかなり怖かった。というか、彼がブロンズソードを持つとまるで短剣のように見えてしまつてちよつとだけ面白い。不安な気持ちで反応を待っていると、数分は見ていたであろうガルカは口を開いた。

「惚れ惚れする輝きだな。俺なんかじゃこの域に達する事はできん。その位の完成度だが、これがクリスタル合成って奴かい？」

「そうだと思います。」

「面白え。鍛冶に関してはちよつとばかし自信があったが、こんなもんを出されちゃあそんなちなけな自信は粉々だわ。こっちからお願ひするべきだな。お嬢ちゃん、すまんが手伝ってくれるか？」

ザビゴは俺の腕を評価してくれたのか、酷く楽しそうに笑つて協力を求めてきた。2つ返事で答えて、クリスタルの元に駆け出そうとすると、クリスタルは持つてきてやるから座つて休んでなと氣遣つてくれた。ガルカを象徴する心の闇は憎悪だと言われているが、実は彼等には優しい人や細かい氣配りができる人が非常に多くいるのだ。

ザビゴにクリスタルを持つてきてもらつてから、ガンガン武器を修

理しまくる事になった。低レベル用の剣ばかりだったので、特に苦も無く200本程を仕上げる事ができた。まだクリスタルは少し余っていたので、以前から依頼されていたという農具も修理できるかどうか試してみたが、どうやら問題なく修理できるようだった。クリスタルってどれだけ汎用性があるというんだろうか。

炎のクリスタルは処分できた。後は雷のクリスタルだが、これは量も少なく1Dしかないし色々使い道も出てくるだろうから持っておくかな。さて、これで旅に出る前にしておくことは終わっただろう。アルディ村でまたすこし休ませてもらって、準備ができたらいよいよ王都に出発するか。ザビゴに別れを告げて家に戻った俺は、アルディ村に戻る用意をして布団に潜り込んだ。

後日聞いた話だが、ザビゴは俺が村を出て行って1ヶ月後位に修行の旅に出たらしい。「鍛冶の深淵を見たくなった。」と言って出て行く彼は素晴らしい笑顔をしていたという話だった。冒険者をしていればきっと彼と再会する事もあるだろう。その時に俺は帰る手段を見つけられているのだろうか・・・。

13話 修理（後書き）

※用語解説

・ガルカの名前

↓ガルカの名前の系統は2種類で、ヒュームから付けられた英単語2語の名前と、ガルカが最初から名乗っている濁点の多い名前です。

・合成スキル

↓各合成スキルは100まで上げることができますが、100まで上げられるのは1種類だけです。60まではどの合成でも無条件に上げることができます。

14話 旅立ち（前書き）

超難産でした。毎日ハイクオリティな文章を量産出来てる作者の方々は一体どんな化け物なの・・・。

14話 旅立ち

激しい頭痛と共に目が覚めた。昨日飲み（飲まされ）過ぎてしまった動く気にもなれない。どうやら2日酔いになってしまったようだ。酒にはそんなに強い方ではないし、飲んで意識なくなったら何をしでかすか分からないから遠慮してただけだなあ。見事に酔いつぶれてしまったようだ。

村人が用意してくれた水瓶の水で顔を洗い、さっぱりしたかと思いきやそんな事はなく、気持ち悪さが酷いため近くにあった椅子に倒れこむように座り、テーブルに突っ伏した。

アルディ村に帰ると、失笑物の英雄譚を聞きつけた村人に絡まれ、付き合わされた結果今に至る。急ぐ必要は無いとはいえ毎回こんな事ばかりしては出来る事も出来なくなってしまう。村人には悪いけども早めに準備をして出発することにしよう、もちろん頭痛が治った後で。

そして大事なのがこれからの身の振り方だな。もし無事に王都に着けたとして、具体的にどうやって働くか、人との接し方はどうするか。

一応確かめてみたのだが、カバンにはゲーム内でのテレサの所持金である5億ギルが入っていた。いや、途中で面倒になって数えるのをやめてしまったので正確には分からないけれども、多分入っているだろう。これを使えば一生遊んで暮らせるであろう事は想像に難くない。

しかし、ずっとこの世界にいる訳ではない（と思いたい）ので少し

でも情報を収集したい。なら王都の人間達とは交流を持っておくに越したことは無い。でもあまり表に出るのは動きにくくなるから却下だな。特にテレサの容姿は肌が白い美形のミスラときていて目立ちすぎるので注意が必要だ。

調理スキルが100だから料理店で調理員か調理ギルドで雑用とかが無難か。そういやサンドリアには調理ギルド無かったんだっけ。ということはどっかの料理店で料理作るか。あ、宿屋があればそこで働くのもありだな。よしよし、大分決まってきたな。

「おはよう。テレサ、二日酔いで苦しんでる最中に悪いんだがちょっといいか？」

いつの間にかテーブルの前にバリーが心配そうな顔で立っていた。バリーの事だからノック位はしただろうが、それに気付かない程注意力が鈍っているのか。二日酔い恐るべし、というか急に顔を上げた瞬間治まってきていた頭痛が再発したため、顔をしかめて再び頭を抱える。

「~~~~っ。おおはようございます、バリーさん。」

「まずいな、あんなに飲まされた後じゃ仕方ないよな。ほら、これを飲んでまた寝ると良い。」

バリーが持っているコップのような物から湯気が立ち昇っていて、まったく気付く余裕がなかったが何やら花の香りが漂っている。匂いを嗅いでいるだけで頭が少し軽くなったような気がする。

「とても良い香りですね・・・何でしょうか、それ。」

「カモミールティーだ。気分が落ち着いてぐっすり眠れるそうだよ。これを飲んで眠れば幾らか楽になると思う。ごめんな、昨日は馬鹿騒ぎを止められもせずこんな事しかしてやれなくて。」

「いえ、バリーさんが謝ることではないですし、実際私も楽しんでいましたから気にしないで下さい。じゃあ、いただきます。」

カモミールティーを両手で受け取り少しずつ啜ると、鼻を優しい香りが通り抜けていった。二日酔いには最適だなこりゃ。ハーブティー等美味いと思ったことは無く今まで飲む機会が殆ど無かったが、体が弱ってる時に飲むと凄まじい効力を発揮するのか。ゴクゴクと一気に飲み干した後、恥ずかしい事をしたのに気付く。

「すみません、余りにも美味しかったので一息で飲んでしまいました。行儀悪かったですね。」

「そんなに美味そうに飲んでもらうと持って来た甲斐があったってもんだよ。さあ、今の状態じゃ動くに動けないだろうしもうちょっと休んでな。」

「はい、ありがとうございます。」

礼を言ってベッドに横になる。このままじゃ確かに準備もできやしないし、ここは素直に従っておいた方が良さそうだな。俺がベッドに入ったのを確認すると、バリーはじゃあまたなと言って家を出て行った。自分が招いた客だからとは言え、ここまでしてくれるとはお人好しな奴だ。そんな事を思いながら目を閉じると、カモミールティーのお陰か俺はすぐに眠りへと入ることができた。

目を覚ますと頭痛はすっかり取れていた。寝巻きから着替え旅の準備をした後、バリーに礼を言うために外に出た。この村には時計がないので分かりにくい。今は昼過ぎだろうか、日光が眩しい。村長の家の方向に少し歩くと、様子を見に来ようとしたのか丁度バリーが歩いてきた。

「どうだ、あれは二日酔いに効いたか？」

「すごい効き目でした。もう頭痛はありません、本当にありがとうございます。」

「礼なんか良いさ。それよりどうしたんだ？」

「はい、お茶のお礼と明日出発する事にしたのでその報告をしようと思ひまして。」

歩きながらそう告げると、バリーは驚いた顔をした。

「もう出発するのか？明日と言わずに一ヶ月だって数ヶ月だって居て良いんだぜ？」

「王都でやりたい事ができたんです。早く行かないと居心地の良いこの村にずっといることになってしまいそうで。」

「まあ、俺達はそれで構わないんだけどな。」

少し話をしていると、村長の家に着いた。バリーが中に入っていっ

たので続いて入っていく。すると、村長と向かい合わせでグースとエレナが座っていた。丁度話は終わったようで、2人は村長に礼を言っていた。何を話していたんだろうか？ 気になりながらも皆に挨拶をして席に座らせてもらった。

「実は、明日王都に向けて出発するつもりなんです。」

「え、もう行っちゃうの？」 「少し早すぎねえか。」

エレナとグースはバリーと同じく驚いた。ドン村長は驚いた様子はなく、少し考えてから言葉を発した。

「そろそろ来る頃だと思っていた。テレサさんは忘れているだろうが、クエストの報酬を用意してある。」

「クエストですか、受けてましたね確か。報酬はどうしても受け取らなければいけませんか？ お世話になった人を助けるのは当然ですしそこまで大した事はしていないと思うのですが・・・。」

「あれが大した事ではないといったら世の中の大抵の事は大した事ではなくなってしまうな。さて、早速持って来よう。少し待っていてくれ。」

聞く耳も持たず、ニコニコしながら村長は奥の部屋に入って行った。戦闘で人を救って感謝される経験なんて日本じゃそうそうお目にかかれない状況だしイマイチピンとこない。あまり凄い報酬をもらっても逆に困ってしまうだけだな。しばらくすると、村長は両手に色々抱えて戻ってきた。ジャラジャラガシャガシャとかなり騒々しいことになっている。

「お前さんは装備は持っていても食糧や旅の道具は持っていないと聞いてな。生活に必要な物と少々の金を用意させてもらった。これなら持つて行っても困らないだろう？」

俺の気持ちまでばっちり配慮してある素晴らしい報酬だ、正直頭の中を読まれたのかと思ってしまう。炊事道具にテントっぽい物に手書きのマップまである。これがあれば王都までは何とかやっていく事ができるだろう。ただ、下着まで入っていたのは小学生の修学旅行に行く時に親に世話を焼かれたのを思い出してちよつと恥ずかしかった。

「凄い……。今の私に必要な物が揃っています。こんなに嬉しい報酬はありません。」

「そうか、それなら用意した甲斐があったというものだ。」

感謝して受け取り、家に戻って旅の準備の最終確認を済ませた後、ささやかな送別会のようなものを行ってその日は終了した。

「さあ、そろそろ出発するか」

決意を新たにバックパックを背負って家を出る。村長の家に行ったが誰もいなかったので仕方なくそのまま村を出ることにした。別れの挨拶くらいはしたかったけど、名残惜しくなってしまうと行けないからな。

歩いていると、村人の姿が無い事に気付いた。何故誰もいないんだ？と思ったが、その疑問はすぐに解決することになった。村の出口に村人が大勢いたからだ。勿論ドン村長や自警団パーティーの姿もそこにあつた。そういうことかい。

「皆さん、冒険者一人に大袈裟ですね・・・。」

俺がそう言うと、村人に「テレサちゃんってどこか抜けてそうな気がするから心配なのよ。」「今からでも村に住んでも良いんだよ。」とまるで家族の事のように言われた。1週間程しか滞在していないのだからもうちょっとドライに行けるかと思っていたが、感極まって涙が溢れ出てしまった。村人の苦笑いや呆れ顔が目痛い。気を落ち着かせると、自警団パーティーが近寄ってきた。

「悪いな、困らせるようなこととして。」

「私はテレサの困り顔が見たかったんだけど、これは予想以上の成果ね！」

「相変わらず鬼畜なこったな。それよりテレサ、この時期にお前と出会えたのは幸運だった。俺の鍛冶道に新たな風を吹き込んでくれたお前には感謝してるぜ。」

「私鍛冶についてグースさんに何かしましたっけ？」

「鍛冶は技術だけじゃねえ、生き様なんだよ。」

そういうもんなのか・・・俺にはさっぱり分からんけども。鍛冶話をしていると、バリーが割って入って来る。

「それよりも、テレサ。今の俺達は頼りなさ過ぎて付いて行けないが、いつか追いついてみせる。そしてお前の横で戦えるような騎士になったら、一緒に冒険して欲しい。」

「はい、是非お願いします。待ってますね。」

「全く、バリー。あんた何それプロポーズ？テレサは渡さないって言ってるでしょ？」

「なっ、こんな感動的な場面で茶化すなよ！エレナ。」

この人達は本当に漫才グループでも組んだ方が良いんじゃないかときゃあぎゃあ騒いでいる自警団パーティーを眺めていると、見かねたのか村長が話を進めだした。

「お前達は本当に変わらん、一生やつとれ。・・・テレサさん、王都はこの先道なりにジャグナー森林、らテーヌ高原を抜けてさらに進んだロンフォールを越えた所にある。大変だとは思いますが、その力があれば容易く辿り着けるだろう。くれぐれも無理はしないように、旅の無事を祈っているぞ。それとクエストの報酬だが、あれで終わりとは誰も思っとらん。皆テレサさんの事を待っているから、近くにくることがあったらいつでも寄りなさい、歓迎するぞ。」

「はい、本当にありがとうございます。お世話になりました。」

深く頭を下げ、ジャグナー森林へと足を踏み出す。途中で何度も振り返ってしまったが、村人は全員俺が見えなくなるまで俺を見送ってくれていた。こうして俺は幸先良く異世界での旅を始めることができた。

色々不安な事もあるが、頑張ろうと決意した俺を応援するかのよう
に珍しくジャグナー森林の空は青く晴れ渡っていた。

14話 旅立ち（後書き）

※用語解説&補足説明

・5億ギル

↓廃人の方ならそれ位持っていても多分おかしくありません。作者は貧乏なので実際の所は分かりませんが。

・調理ギルド

↓ゲーム内ではウィンドスにしか調理ギルドはありません。

・カモミールティー

↓CHRが上がる飲み物です。このステータスが重要な詩人や獣使いに人気があったりします。

・ラテーヌ高原、ロンフォール

↓ジャグナー＞ラテーヌ高原＞ロンフォール＞サンドリア
という風にエリアがつながっています。

別視点（バリ）（前書き）

投稿が遅れた理由は勿論FF11やりまくっていたからです。申し訳ありません。

別視点（バリー）

◆バリー視点◆

油断していた。まさかサージェントが街道に出張ってくるとは思っていなかった。街道の脇で休憩していた俺達は、いつものようにこれから先の事・将来の夢なんかについて話し込んでいた。何十回も往復している道で敵を倒し続け、それなりに強くなって慢心していた俺達は近付いていたオークに気付くことができなかった。

いきなり飛んできた矢にエレナが悲鳴を上げ、それが戦闘開始の合図になる。顔にかすり傷を負った彼女を見て頭に血が上り、駆け出そうとすると、不意に肩をつかまれて引き戻された。

「バリー！ 気持ちは分かるが落ち着けよ。今一人で突っ込んだら相手の思うツボだぜ！」

「・・・！ すまん、迷惑かけたな。」

危なかった。グースの言う通り突っ込んだら速攻で死んでたな。いつも冷静に物を見られるグースの言葉で何回俺達が助かったか分からない。俺なんかよりもよほどパーテイリーダーに向いているはずだが、それを言うと毎回同じ言葉で断られる。臆病な奴はリーダーに向いていないらしい。俺はグースを臆病だと思った事はないんだが。

「エレナ、強化魔法を頼むぜ！ グースは弓持ちをやってくれ、俺は盾持ちの方を引き付ける！」

「任せときな！」

「了解。それとあまり私を気に掛け過ぎない事！戦闘に集中して！」

「分かってる。オイお前、こっちへ来やがれ！」

指示を飛ばしながら目の前のサージェントを挑発する。望む所とばかりにオークが雄叫びを上げて突き進んできた。使い慣れた両手斧を盾にして剣を受け止めると、今まで感じた事のない重さがのしかかって来た。辛うじて受け止め、思い切り上に剣を跳ね上げて隙を作り、がら空きになった脇腹に斧を叩き込む。行った！と思ったが盾で防がれたようだ。しかし、両手斧の攻撃は勢いを完全に殺し切ることは出来なかったらしく、オークは2m程後ろへ飛んだ。

後ろからエレナの強化魔法であるプロテスが掛けられたのが分かる。これなら多少の攻撃に耐えることが出来そうだ。今度は俺の方から仕掛けていく。下から上に両手斧を振り抜くと、オークは盾で受け止めた。少し腰が浮いた所で上から下に振り下ろした。オークは予想していたのか横に飛び退き、俺の斧は地面に叩きつけられる。

オークは無防備な姿を晒してしまった俺を見逃すはずもなく、剣を横一閃に薙いだ。間一髪の所で転がってかわし、距離を取る。コイツ、強えな。

「何でこんなところにサージェントが・・・！」

村に近いこんな所には出て来ないはずの兵長クラスのオークを目の前にして、自然と言葉が出てしまう。じりじりと後ずさっていると、矢が後ろに飛んでいくのが横目に見えた。エレナの痛みを伴った声が響いた。

「ぐっ……。」

エレナの忠告も忘れ、慌てて振り返って無事を確認してしまう。

「エレナ、大丈夫か！」

「バリィ、前から来ているわ！……ああっ」

頭に衝撃を受けた。意識を失うまでは行かなかったものの、思考出来るほど頭が回らない。グワングワン揺れる視界の中で悶絶し、この状態で相手から攻撃を受けた場合どうなるかを想像して恐怖した。次に奴から一撃を喰らえば俺は確実に死ぬだろう。クソッ！こんな事ならもつと必死に修行しておけば良かった。そして覚悟もできないままオークからの攻撃を待つ。

・
・
・

・
・
・

・
・
・
？

攻撃が来ない。何でだ？未だに揺れる頭を無理矢理上げて目の前に視線を向けると、そこには今しがた戦闘していた相手であるはずのオークが盾ごと真っ二つになって転がっていた。

何が起こった？視線をさらに上げてみる。弓持ちのオークが逃げている、青いローブのような服を着た誰かがその背中に剣を突き刺しているのが見えた。気を失いそうにはなったが、2分程頭を下に向けていただけなのだが、あの誰かはその短時間で奴ら2匹を倒した

のか……。目の前で起きた出来事なのににわかに信じ難い。

俺はすぐに状況を把握できずにポカンと口を開けたまま間抜け面でその光景を見ていたが、彼女が振り返ったことで更に啞然とした。彼女はミスラで（ミスラだというのは驚くことではないが）何と俺よりも年下だと思えるような顔をしていたからだ。ちらりと横を見ていると、他の2人も口を開けて俺に負けず劣らずの馬鹿面を晒している。

「ご無事でしょうか？」

彼女はぎこちなく丁寧な口調で話しかけてきたが、突然の状況に俺達は反応を返す事ができないでいた。少し考えていた彼女はああ、と納得したような顔をして帽子を取り、自己紹介をした。別にそういう問題ではなかったんだが、そのおかげで正気を取り戻すことができた。助けてくれた礼を言って俺達も自己紹介をした後、どういう理由か分からないが森を彷徨っていた彼女を村に案内する事になり、パーティーの仲間が1人増えることになった。

実を言うと、彼女の容姿は帽子を被った状態でもとても可愛くて目を奪われそうになったが、帽子を取った後は一発ノックアウトされたのを隠すのに必死だった。これまでの経験からミスラは少し褐色な感じの肌だと思っていたが、彼女の肌はあまりに白く美しかった（他のミスラが美しくないとやっている訳では断じてない）。顔はこれでもかというほど整っていて、ミスラ特有の耳・尻尾・少し獣っぽい鼻がこれまた彼女の姿をより一層引き立たせていた。

飯を食いながら話している時は興奮して何をしゃべっているか分からなかった。彼女の耳と尻尾は彼女の感情を露骨に表しており見ていて飽きない。少し意地悪な質問をしてしまった事があって、その

碌な物を食べてなさそうだったしさすがに夕食は食べさせた方がいいだろうな。よし、開けるか。

入った瞬間に俺は自分の馬鹿さ加減を呪うと同時に目の前の光景に釘付けになってしまった。彼女は下着で寝ていて――少し考えればその可能性は予想できたはずだ――しかも上の方は完全に胸から離れていたのだ。スレンダーな体なのに胸の大きさが半端じゃない……。すぐさま目を離そうとしたが、本能がそうさせてくれない。

下ろした髪がベッドの上で乱れていてそれが凄まじく色っぽく見える。安心しきって無防備な寝顔が俺の理性を叩き潰そうとしているようだ。鼻血が出始めた所でようやく目を彼女から引き剥がした俺はそつと小屋を出るとエレナの家へと向かった。エレナの家族は既に集会所に行ってしまったためか家には彼女しかいないようだ。

「テレサの事を起こしに行ってくれないか？頼む！あの状況じゃ俺には起こせない。」

「あの状況って何なのよ？自分で起こしに行くとか言ってなかった？」

「俺の口からは言えん。とにかく頼まれてくれ……！」

「分かったわよ。でもアンタ、自分の発言には責任持ちなさいよね。」

「すまん、助かる。」

後程あの状況を理解したエレナに「最高の夜になりそうね」だの「

「しばらく燃料には困らないわね」だの嫌味な言葉を投げつけられたが、違うと言えない俺はまさしく最低の変態野郎な訳だ・・・。

隣村であり、交流も多かったモリズ村が壊滅の危機に瀕していると報告があったのは一昨日の事だった。チヨコボで駆け込んできた使いは俺の家に直行し、親父にオーク共がゴブリン達の支援を受けて陣を張ったことを訴えてきた。

あの村はアルディ村よりも大きく、何度も侵攻を退けてきた事も有りそう易々と落ちないだろうが、今回ばかりは数が違う。二百人を超える兵士が村を襲おうとしている事がシーフのカティア姉さんの調べで分かったらしい。モリズ村1番の実力者でいつも冷静沈着なあの姉さんが顔面蒼白でラザール村長の家に駆け込んだと言うから驚きだ。

村の主な男衆が集会所に集まり援軍の準備をしていたが、厳しい戦いだと言わざるを得ないようだな。テレサに応援を頼むかどうかについてはかなり紛糾した。恩人に戦鬪をさせるのに抵抗を感じた奴、主に俺達自警団だがこの村まで襲われた時の事を言われてしまった

ら何も言い返すことができなかった。結局テレサには状況を伝えてクエストとして手伝ってもらえないかとお願いをしてみる方向で決定した。

彼女は2つ返事で加勢に応じてくれ、俺達アルディ村の援軍はすぐに出発した。彼女は強いが、この作戦に参加してから何故かオドオドしていて落ち着きがなくなっている。いや、彼女は出会ってからずっとオドオドしているように見えるが、今はまるで初めて戦闘をする時のような不安な様子を醸し出している。歴戦の勇士でもこんな事があるもんなのかと彼女の心を和ませる努力をしながら歩き続けた。

ようやくモリズ村に着いた。幸いな事に攻め込まれる前に到着できたようだ。村の中央にある広場で親父の昔の冒険者仲間であり村長でもあるラザール爺さんが声を張り上げて指揮を行っているのが見える。やはり2日3日では準備を完全に終えることができなかったらしく、村の戦士達の装備やバリケードは所々不十分なようだ。それを考えると既に準備を完了しているオーク共は悔しいが良い仕事をしていると言わざるを得ない。

そんな事を思っていると、遂にオーク共が侵攻を開始した。雄叫びを一斉に上げて攻め込んでくる様には少しひるんでしまう。まずいな、土気が落ち込んでいる今の状況じゃ奴らは止められない。嫌な予感に背筋が冷たくなる。戦う前から弱気になったら終わりだが、これはもしかすると・・・。

その時、横にいたテレサが突然とんでもないスピードで駆け始めた。まだ200ヤルム程はあろうかという距離を一気に移動すると、モリズ村の戦士達の前に回り込んで見えなくなってしまった。あんなに速く走れるのか、彼女は。

援軍一同が急いで本隊に合流した所で紫色の目も眩む程の光が辺りを覆った。何が起こったか分からず、目を凝らしてみると先頭にいたオークやゴブリン共が消し炭になっているようだ。これはテレサがやったのか？あまりの出来事に敵も味方も動きが止まってしまっている。

「テレ・・・」

「リフレッシュⅠⅠ、プロテスⅤ、シエルⅠⅤ、ヘイスト・・・」

呼びかけようとした所で彼女は強化魔法の詠唱に入ってしまった。この状況で行動を開始できるという事はやはりやったのは彼女なんだろう。彼女の詠唱が終わったと同時に味方が歓声を上げ、戦闘が再開された。

親父・俺・グース・エレナはパーティーを組んで敵を各個撃破する形で戦う事になった。大半の敵はテレサに向かっていつているので、村人達の負担はかなり軽くなっている。俺達は討ち漏らした敵を倒しながら少しずつ前進していった。彼女はもう既にかなり前の方まで行ってしまい、相変わらず奴らを薙ぎ倒している。

彼女と一緒に戦いたい、いつか肩を並べたい、と凄まじい戦いぶりを見てそう思うようになっていた。そう思って彼女の方を見ていると、後ろからオークが斧で襲い掛かろうとしているのが見えた。いてもたってもいられず、俺は駆け出した。

「待て、早まるんじゃない！テメーじゃ無理だ！」

親父の声が聞こえた気がしたが、今は関係ない。彼女を助ける事し

テレサは俺達村人の言葉に感動したのか涙を流しながら村を後にした。途中で何度も振り返って手を振る様子がたまらなく可愛かった。

「いいの？ 一人で行かせちゃって。」

「ああ、俺は未熟だ。このまま行ったら確実にお荷物になるから行かない。」

「そんな事言っちゃって、アンタの顔は今すぐにでも追いかけていって言ってるけど。」

「う、うるさい！ 行かないといったら行かないんだ。」

「そう怒るなよ、俺達も協力は惜しまねえから頑張ろうぜ。ところで大好きなテレサちゃんの泣き顔は堪能したかな？ 今も凄い顔真っ赤だよ、バリー君。ええ？」

「お前らっ・・・！ グース、お前そんな意地悪なキャラじゃないだろ。」

エレナとグースにむきになって反論しながら俺はこれからの計画について考えをめぐらせていた。まずは親父との修行をもっと真剣な形で始めないとな。さあ、忙しくなるぞ。俺の騎士道はまだ始まってすらいないからな。待ってろテレサ、お前位に強くなって並んで戦ってやるからな。

別視点（バリ）（後書き）

※補足説明&用語解説

・ヤルム

↓ヴァナの長さの単位です。現実世界のヤードと同じ位と考えられています。ちなみに1ヤード＝0,9144メートルです。

過去編（天晶暦887年 四国会談）

——天晶暦887年5月、ウインダス連邦聖都「天の塔」——

ウインダス連邦の最高指導者であり信仰の象徴である「星の神子」は奇妙な胸騒ぎに眠りを妨げられた。

「これは一体・・・？」

胸騒ぎというにはあまりに強く感じる圧迫感に一瞬体の不調かと考えたが、本能がそれを否定した。

少しの間胸を押さえてうずくまっていると、次第に圧迫感は消えて行き、替わりにある場所に行かなくてはならないという使命感が生まれていた。まるで何かに呼ばれているように。

深夜にも関わらず、星の神子はある場所へと続く隠し通路を開き、階段を下りていく。

長い長い螺旋階段を最後まで降り切ると、扉が現れる。神子は手馴れた動作で扉を開いた。

出た場所は「心の院」。ウインダスには目・鼻・口・耳・手の五つの院があり聖都を支えているのは有名な話だが、ここは秘匿された六つ目の院であり、その存在を知っている者は極少数だ。

神子は一瞬だけ立ち止まったが、すぐに歩き始める。ここは彼女にとって特別な場所だが、今用があるのはここではない。

部屋にあるもう一つの扉を開けると暗い水路が広がっている。彼女は意を決して進み始めた。ここから先はモンスターが徘徊する危険な領域なのだ。

高ランクの冒険者なら何とか進めるダンジョンだが、生憎神子はそこまで戦闘能力に秀でている訳ではない。

命がけの一人行軍が予想されるが、今は護衛など呼んでいる時間は無い。そんな気がしてくる。

しばらく歩いていて神子は拍子抜けしてしまっていた。モンスターが一匹も視界に入って来ないからだ。

不気味な程静まり返った水路を進んでいくと、目的の場所に繋がる移送の光のある祭壇が見えてくる。

神子は光を使い、最終目的地に辿り着いた。目の前の淡く光を放つ泉が「満月の泉」だ。

歴代の神子が予言をするために訪れた場所、そしてここは霊獣である「フェンリル」が住まう神聖な場所でもある。ウインダスの歴史とは切っても切り離せない関係なのだ。

祈りを捧げていると、泉がより一層強い光を放ち、それが一箇所へと集まったかと思うと巨大な狼が姿を現した。

「良い顔をするようになったな、星の神子よ。」

「貴方にそう言われると嬉しいです、霊獣フェンリル。お急ぎのようですが何があったのですか？」

かつてウィンドスの危機を救った偉大なる靈獣がはつきりと苦い顔をするのを神子は見た。

「正確には何が起こっているのか、我にも分からぬ。だが、この事態はいずれ必ずヴァナディールを崩壊へと導くだろう。」

フェンリルは静かに語り始めた……。

——天晶暦887年7月、ジュノ大公国ル・ルデの庭大公私邸「オーロラ宮殿」——

ジュノの大公私邸はアルタナ連合の代表者が話し合いを持つ場合に頻繁に使われる。

大公カムラナートが不在の場合には一般にも公開されるという変わった建物である。

その一室にはウィンドス連邦の代表者とウィンドス連邦からの緊急召集で呼び出された三国の代表が既に席に着いていた。

ウィンダス連邦からはウィンダス三博士の一人シャントット、口の院院長アジドマルジド。

サンドリア王国からは次期国王トリオン王子、弟のピエージェ王子、神殿騎士団団長クリルラ。

バストワーク共和国からは大統領補佐ルシウス、ミスリル銃士隊長長フォルカー。

そして開催国ジュノからは首相エシャントール、ジュノ親衛隊隊長ウォルフガング。

各国の政治の中心人物が集まっているだけあって部屋は異様な空気に満ちている。

まだ本格的な話し合いは始まっておらず、飲み物を片手に軽口の応酬が繰り返られていた。

「フォルカー隊長、貴方の国の内部対立は納まったのかしら？」

「はぁ・・・。」

いきなり爆弾発言を投げかけるのはシャントット博士。横からはまたかと言わんばかりにアジドマルジドが溜息を吐く。

シャントット博士の名は悪名高く、一部の人間からは悪魔と呼ばれて恐れられている。

「当然納まりました。しかもそのお陰でバストワーク内部の団結力は逆に相当高まったと思いますね。」

にやりと笑って余裕を見せるのはフォルカー隊長。20年前の水晶大戦時、闇の王を討ったとされる英雄である。

「そのにやけ顔、似合ってなくて気持ち悪いですわ。それに、銃士隊の危機を一介の冒険者に助けてもらったとかお聞きしましたけど・
・・ホホホ。」

その言葉を聞いた途端、フォルカーの顔色が一変する。

「どこでそんな情報を・・・！まあいい、それは本当ですよ。」

「フォルカー隊長、重要な情報を簡単に漏らされると困るんだが。」
ルシウス大統領補佐が呆れた顔で止めに入るが、フォルカーは止まらない。

「大丈夫だ、ルシウス。ウィンダスではご自慢のカーディアンが大暴れしたとお聞きしたが如何かな？」

「あら、良くご存知ね。でも悪いのは全部ここにいるアジドマルジドの父親のゾンパジッパですよ。あの変人がちゃんと整備しなかったから自分は愚か神子まで誘拐されそうになったのですわ。」

「ほう、それは興味深い・・・。」

フォルカーは予想もしなかった返答に目を丸くした。

ゾンパジッパはアジドマルジドの父親であり、ウィンダスの警備に

組み込まれている魔法人形「カーディアン」の開発者でもある。

自ら作り上げたカーディアンに誘拐され、生死が分からなくなっていたが、つい最近になって消息が掴めたのだという。

「博士。人の父親を元凶のように言いながら機密をばらすのやめてもらえませんか？」

「本当の事じゃない。それに勝負は公平な所から叩き潰すのが面白いのよ。ねえ、トリオン王子。」

駄目だこりゃと諦め顔で会話を放棄するアジドマルジドを尻目に今度はサンドリアへ喧嘩を売りに行くシャントット博士。

彼女の暴走は彼女にとって最早正常な状態といっても過言ではない。

「ああ、その通りだ、博士。今回は随分と有意義な話し合いになりそうだな。」

トリオン王子は面白そうに笑って答える。

「そう言って頂けると召集した甲斐があるという物ですわ。で、そこらはどうですか？オーク共に遅れを取ったと笑いものになりますけれども。」

「な！シャントット博士、それは失礼でしょう！」

「クリルラ、よい。この位で動揺していたら博士の相手は務まらぬのだ。」

齒に衣着せぬ言い草にクリルラが憤慨するが、トリオン王子は落ちていて彼女を制止した。

「ああ、遅れを取ったというのはあながち間違ってもいない表現だな。何しろ王城まで侵入を許した訳だからな。聖剣を盗まれ・・・」

聖剣という単語が出た時点で他国の代表達は目を輝かせて話に聞き入ろうとしている。

「そこまです、兄上。クリルラに余裕を見せ付けた割には罠に嵌ってしまっているではありませんか。他国が重要な情報を出しているからといって面白くなってそれ以上の事を話されようとする等・・・まあ兄上らしくはありますがね。」

すかさず話を中断させたのはピエージェ王子。勇猛果敢で知られたトリオン王子とは正反対で冷静沈着で頭が切れるとの評判が高い。

「むう、そうか。面白い戦いになると思ったのだがな。」

何でも戦いに持っていこうとするんだからとピエージェ王子は苦笑する。

この王子達兄弟は一般的には仲が悪いとされているが、実は違う。

二人ともそれぞれを認め合っているが、二人を取り巻く環境がそれを許さなかったのだが、トリオン王子が言いかけた「聖剣の一件」で最近ようやく兄弟のわだかまりが解消されつつあり王都に仕える者達はこれまでにない充実感を得ているという。

選手交代とばかりにピエージェ王子はシャントット博士に話しかけ

る。

「そんなにつまらなそうな顔をしないで下さい、シャントット博士。我が国の情報力の高さも見てもらえませんか？先程の神子誘拐ですが、これも冒険者が関わっているのでしょうか？」

「へえ、良く分かりましたわね。筋肉と頭の固さだけが取り柄の国かと思ってましたわ。最近スパイを送っても芳しい結果が得られなかったのはあ・な・たのお陰だったのね！」

ピエージェ王子は、黒い笑みを浮かべながら詰め寄ろうとする博士をさらりと受け流す。

「どうかお手柔らかに頼みますよ。それと博士が送ってこられたスパイというのはもう目星がついておりますので交代された方がよろしいかと。その代わりといっちは難ですがこちらも情報を提供いたしますよう。サンドリアでの一連の事件にも冒険者が絡んでいますよ。」

「あら、そんな事はとうの昔に分かっている事ですわ。」

「はあ、どこから聞いたのか。私の目もまだまだということですかねえ……。」

わざとらしい溜息を吐きながら肩を落としたピエージェ王子にシャントット博士は苛立った。

「どうせそういう情報が流れるように仕向けたのでしょくに、素直じゃないわねえ……。」

ピエージェ王子は今まではどこか頼りなげな印象だったが、何かがあって吹っ切れたのか、いつのまにか隙を全く見せない上に口も達者になったようだ。

今後危険人物としてマークしなければならない、と心の中で彼にターゲットをロックした。

そこへ痺れを切らしたトリオン王子が割って入る。

「ピエージェ、お前だけお楽しみとは卑怯ではないか！熱くなって楽しんでるのはどっちなのだ！」

苦笑いで謝るピエージェ王子と楽しみを奪われてご立腹のトリオン王子、そして自分が主導権を握れないことで黒いオーラを発するシヤントット博士を見ていたバストウーク代表者の思う所は一つだった。

「（こいつら脳筋過ぎるだろ・・・）」

ぎゃあぎゃあど騒ぐ代表者達の話にこやかに聞いていたジュノの首相エシャントールだったが、話が沈静化してくると初めて口を開いた。

「皆さん面白そうな話をしているようですから私からも面白い事をお聞かせしましょうか。」

首相は各国の代表から一斉に目を向けられても表情を全く変えずに続ける。

「大公カムラナートは二年程前にとある冒険者によって討ち取られ

ています。」

「「「「「「ブーーーーーッ！！！！」」」」」」

その場にいた全員が飲んでいたサンドリアティーを噴き出した。

「嘘だ！首相！！仮にも親衛隊長の俺も知らないってありえないでしょう！？どうか嘘と言ってください！！」

尊敬する大公がもう死んでいるという事と何も知らないまま二年間ものうのうと過ごして来た事を今になって知り、ウォルフガングは発狂寸前になっている。

「敵を欺くにはまず味方からと言います。それに彼らは討ち取られるに足る事をしようとしていたのですから仕方なかったと言えるでしょう。」

「彼らと言うことは・・・エルドナーシュ様も・・・？あんな小さな子供まで！？その冒険者と言うのは一体誰なんですか？」

「皆さんは多分分かっていないと思いますが、そこまで実力のある冒険者と言ったら彼女しかいないでしょう？四国全ての事件に影響を与えているようですし。それにエルドナーシュ様はカムラナート様の兄ですから子供ではありませんね。」

「「「「「「はあ・・・？」」」」」」

次々と出てくる奇想天外な事実には部屋の中はすっかり沈黙してしまっただ。ようやく口を開いたのはシャントット博士。

「で、冒険者のあの娘の事も含めて具体的な事はやっぱり教えてはもらえないんでしょうね？」

「ええ、その通りです。何を聞かれてもお答えする事は出来かねますのでご容赦下さい。」

エシヤンタール首相はにっこり笑うと話を強制的に打ち切った。

二年間も平気でこれを隠し通せたエシヤンタール首相の政治手腕に皆が寒い思いをしていると、部屋の入り口がノックされ一人のタルタルが入ってきた。

「侍女長のズババと申します。お待たせして申し訳ありません、ウインダス側の準備が整いました。」

そう言うのと、ズババの後からまたタルタルが一人姿を現した。

そのタルタルの様子を見て、ウインダスの二人とエシヤンタール首相以外のメンバーは息を呑んだ。

「星の神子殿・・・あなたがジユノにいらっしゃるとは一体何が？」

トリオン王子の疑問は最もな物だ。開催国なら話は別だが、普通一国家の元首が会談に出て来る事は有り得ないと言っても良い。

この場にバストウークのカルスト大統領、サンドリアのデステイン国王がいなくても当たり前前の事だと言える。

その当たり前が覆された事により、使者達は想像以上の事態が起きているのを嫌でも認識させられてしまっていた。

「先日、私は靈獣フェンリルに呼び出され、満月の泉に行って参りました。その時にフェンリルからこの世界で今起こっている事について告げられました。長々とした説明は追々するとして、今は端的にその現象だけを申し上げましょう。ヴァナディール全土からクリスタルの加護が無くなりつつあります。」

神子の言葉に全員が押し黙った。クリスタルの加護が失われる事によって何が起こるかを各々が頭の中に思い浮かべていたからだ。

フォルカー隊長が恐る恐る神子に尋ねる。

「神子殿、最終的にはどうなるのかご説明いただけるだろうか？」

「ええ、勿論です。皆様もこの世界がクリスタルによって支えられていると言う事はご存知だと思いますが、その支えが無くなる訳ですからヴァナディールに満ちる力が失われ、最終的には世界全体が崩壊を始めるだろうとフェンリルは言っていました。彼は靈獣というにはあまりに感情的になっていてヴァナディールを『滅び行く世界』等と呼んでいましたが・・・。」

「私もクリスタルの力が弱っていた事は調査によって知っていました。しかし、原因までは掴めていませんでした。その辺はフェンリルは何と言っていたのでしょうか？」

エシヤンタール首相は独自の調査機関を持っていて、その情報からクリスタルの力が弱まっている事は確認していたが、原因の究明は困難なものとなっていた。

何故なら原因と呼べるようなものが全く見つからなかったからだ。

「フェンリルもさっぱり原因が分からなかったようで、怯えているように見えました。」

霊獣にさえ原因が分からないのに人間にそれを解決する事が出来るのかと、その場は騒然となった。

そこから先は議論が紛糾するばかりで何の進展も得られるまま会談は終了した。

会談を終えた各国中枢部では「滅び行く世界」を何とか食い止めようと様々な努力がなされるが、効力を見せた作戦は全く無かった。

これ以後、クリスタルの加護を失ったヴァナディールは徐々に衰退して行き、暗黒時代と呼ばれる時代に突入していく事になる。

過去編（天晶暦887年 四国会談）（後書き）

※補足説明&用語解説

・天の塔

↓ウインダス連邦の政治と信仰の中心点です。聖都にあり、巨大な樹に覆われています。

・霊獣フェンリル

↓水晶大戦時にウインダスを救ったとされる獣です。プレイヤーはフェンリルの分身のようなものを召喚できるようになります。

・ル・ルデの庭

↓ジュノは二つの大陸の間の海の上に建っている巨大な塔です。その最上階の名称です。

・とある冒険者

↓もちろん物語の主人公の事です。ウインダス・サンドリア・バストウーク・ジュノの事件全てに巻き込まれていきます。ゲーム内で実際に体験する事が出来ます。

・カムラナート、エルドナーシュ兄弟

↓カムラナートの見た目は青年、エルドナーシュの見た目は少年です。エルドナーシュはある出来事がきっかけで成長しない体になっていますが、カムラナートより年上です。大部分のNPCはその事実を知りません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2517t/>

【FF11】自キャラ憑依物（作者の趣味）

2011年8月31日19時47分発行